
-NARUTO-転生

莓リズム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

- NARUTO - 転生

【Nコード】

N3046W

【作者名】

莓リズム

【あらすじ】

目が覚めたあたしはなぜか、変な人に話しかけられて・・・？
??

原作&キャラほぼ崩壊！！

少しグロイです^m^

プロローグ（前書き）

原作&キャラほぼ崩壊です。

ナルト詳しくないのでダメだしはやさしくお願いしますm (____) m

でわどづぞ (* ^ ^) v

ブローグ

あたしは椿山　おはな

目が覚めたら意味わかんない場所にいた。

えッ??何???

体ないんだけど!!

でも耳聞こえるしは目に見えるし・・・どうなってんの???

?「あッ!起きたあ???

!!!!!!

おはな「誰!!ここどこ!!そしてあたしどうなってんの?」

?「私は女神と思ってねえ!!ここは私の家!体の事は気にしな

いでえ〜
」

つつこんでいいすか??

思えねーよ!!

なんであたしあんたの家いるわけ??

気にスンナって気にするだろ普通!!!

女神「あ!!説明するから落ち着いて
」

心の声まで聞こえるんだ・・・

少し安心。

てかなんで つけてんの??

女神「まず、あなたは死にました。」

おはな「・・・・・・・・・・はあ・・・・・・・・・・」

女神「けどあなた・・・・・・・・病気で死んじゃって好きな事できなかったでしょ???」

確かにそうだ。

15年間、生まれつき体の弱かったあたしはずっと家の中でこもっていて、発作が起きてはいけなから

走れなかったし、寝たきりだった。

女神「少しかわいそうだと思って・・・あなたかわいいのに・・・」

そこ???

女神「だから、あなたを転生させちゃいます!」

は???

女神「体と顔と髪はそのままね?希望があつたら言つて!!それで
転生の場所はナルトの世界!!」

ええーーーー???

勝手に決められてんの???

ナルトは少し知っている。
前世の時読んでたから・・・

まあ・・・希望を言っている。

おはな「えつと・・・名前はそのままね！！体とかは同じでいいけど、髪は色そのままで、落ちる時はショートヘアがいい！！」

女神「どんな感じの??」

そういつてカタログを見せてきた。

ボブだ！！

おはな「ボブがいい！あと前髪はそれと同じでのびないようにしてて！！」

女神「前髪はのびないようにと・・・んで何の力がほしい？？」

おはな「んーと強くてなんでもできる能力と火影・・・木の葉の忍びがいい！！！」

女神「O()K!!!服もカタログから選んで!!！」

短い浴衣のピンクにした。

女神「連載の4年前に落とすよ。年はナルトと同じね？必要品はあとで落とすからね？じゃいっというで〜」

連載の4年前って・・・
多分9歳になんの????

あれ？？足元が・・・

おはな「きゃあああああああ」

女神とかいう人！！！！

空から落とすなんてひどくない！！！！？？？

次会ったら一発殴らせてもらっからねッ！！！

プロローグ（後書き）

感想をくればうれしいです（*^^^）
v

落っこちた（前書き）

学生なんで土日が連休ぐらいしか更新できません。
ご了承くださいm（——）m

落っこちた

「ひゃあああああ！！！！！！！！」

マジかよ！！

死んだばかりだけどマジで死ぬんじゃない？？？

落ちてる途中だけど着物とか髪を見た。

髪の色はきれいな茶色でけっこう気に入った。

ちょーー！！！！

マジでやばいー！

下なんか地面もつ見えてきたし！！！！

そーだ!!

能力でなんかしたら助かるんじゃない???

うーんと・

確かこんな感じだったかな??

おはな「忍法!!って間に合わねー!!!!」

もうダメじゃー！ー！！！！

おはな「きゃあああああ！！！」

覚悟をして目をつぶった。

あれ???

.....

ドーンとかいう効果音は？？

目を開けたら・・・なんと！！

サスケが助けてくれたのでわないか!!

姫さん抱っこですかああ???

は……恥ずかしい……

サスケ「大丈夫か??？」

おはな「いや・・・あの・・・すいません!!--!重いでしょ?？」
おろしてくれていいよ?？」

おろしてくれたけどなんか顔見てくる・・・

なんかついてんのかな???

周りになんか人がいっぱいいる……

いるか先生「サスケよくやった。えーと君・・けがない?」

おはな「あ・・はい。大丈夫です。」

サスケ「なんの術を使おうとしたんだ??」

おはな「あの・・・ここですか??木の葉の忍びですよね?」

いるか先生「ああそうだ。簡単に言うところには忍者アカデミーだな。」

よっしー！！！！！！！！

おはな「行くとこないんでアカデミーに入れてください!」

土下座しました。

みんなびっくりしてる。

「いるか先生。顔あげて……いいよ。うちのクラスにくるといい。火影様の所に挨拶に行こう。」

サクラ「敬語はやめて。あたし春野サクラ。あなたは??」

おはな「椿山　おはな。よろしくね。」

内なるサクラ「外見も名前もかわいいじゃん!!チャクラもスゴイ
し・・・

サスケ君絶対おはなの事好きに・・・」

おはな「サクラも十分かわいいと思うよ?」

サクラは図星で小声で聞こえてるの?といった。

おはな「今は聞こえやすいのだったから・・・」

んで火影様に挨拶して許可をもらった。

明日からアカデミーに行くことになった。

家はアパートにしようと思ったけど、1人になると上から大きい靴が2、3個落ちてきた。

中は生活用品と、布団とか入っていて、お金がこっちの世界では100億入っていた。

なので一番高いアパートを一括で買った。

家に行ってベットやテーブルなどを配置した。

明日が楽しみだなあ？

キツネ・・・いや九尾！！

まず・・・起きたけど・・・

大変な事に気が付いた。

アカデミーの場所・・・どこ???

まず、町つーか人気のあるところに行き、人に尋ねることにした。

あれ？？？ナルト？？？

どーやらいたずらをしてお店の人をこまらせていたようだ。

ちゃーんす!!

おはな「チエストーオ!!!!!!」

ナルト「ぶほお!!」

必殺!!飛び蹴り!!

おはな「ナルト!!何してんのよ!!すみません。許してやってください。お前も謝れ!!」

ナルト「いった!!・・・ごめんなさい。」

店の人は笑って許してくれた。

ナルト「なんだってばよ!!」

おはな「アカデミーの場所わかんないから教えて。」

ナルトはしぶしぶ連れていつてくれた。

おはな「なんでイタズラするの??」

ナルト「……俺ってばよ……友達いねえからよ……」

おはな「そんなことしても、友達できないよ??? あたしが友達になるから、イタズラ……もうやめてね。」

ナルトは嬉しそうにアカデミーまで走った。

で
教室

サクラ「おはよう。おはな!!」

おはな「おはよう。」

内なるサクラ「おはなといれば、サスケ君と仲良くなれる!!ナルトがいるけど・・・」

サクラ「あんた、なんでおはなといるの??」

ナルト「おはながアカデミーの場所分らないって・・・それと俺と友達になってくれたってばよ!!」

サスケはカチンときたようで・・・

てかなんで怒ってるんだろっ・・・

サクラ「おはなは鈍感ていうか鈍いのね・・・その辺は・・・」

おはな「?????どういうこと???サスケやいのとかも友達でしょ?」

みんななんでため息ついてんの????

いるか先生「おはよう!!おはなは空いてる席座れ!!」

おはな「空いてる場所・・・サスケの隣ね。」

いのとサクラが落ち込んでる・・・なんでかなあ??

今日は陰分身の術らしい・・

サスケがコツを教えてくれた。

んでやってみる。

ぽぽん！！

おお！！

戻るとナルトは格闘してた。

おはな「何してんの??」

ナルト「この術一番嫌いだってばよ・・・」

おはな「チャクラが乱れてるわよ??あせつたらダメ。落ち着いて集中するの。」

ナルト「落ち着いてっと・・・陰分身の術!!」

ぽぽん!!

ナルト「できたってばよ!!」

おはな「おめでとー!!」

その夜

ナルト「いやー！初めてできたってばよ！」

おはな「あんたサクラに好かれたいんだったらイタズラやめなさいよ??」

ナルト「分かってるてばよ!!」

次の瞬間だった。

ナルトがいきなりキツネになった。

おはな「・・・え????ナルト??」

暴れだす。

やばい!!-!-!けっこつでかい!!-!

ガ
シ
ュ
ッ
！
！

おはな「きゃあああああ！」

右手が引つかかれた。

でかいから腕の所ぎりぎりだから腕の下は動かせるけど、上は傷で動かない。

血の量も半端ない。

このままだと出血大量で死ぬ！！

いるか先生「どうした？？おはな！！」

火影様とその他の先生が来た。

おはな「あのね、ナルトが急にキツネになって・・・引つかかれたの。」

火影「九尾じゃな・・・おはな、ナルトだってことは内緒じゃ。もちろん本人にも。
みな！！ナルトを止めよ！！」

そのあと、サクラやサスケが来た。

サクラ「腕・・・大丈夫？？あれはキツネ？？」

火影「サクラ！サスケ！おはなを病院に連れて行け！！」

「はい。」

そこから意識がなくなった。

ベタすぎだろ!! (前書き)

おひさ^^

眠い・・・

けど更新するわし・・・

(T—T)

ベタすぎだろ!!

おはな「うーん・・・」

どこだここ???

おはな「イタッ!」

右手の上ら編が包帯を巻かれてる。
そして地味に痛い。

どうやら夢じゃなかったようだ。

・
・
・
・
・

アメリカンジョークじゃないのか・・・

横を見ると、ナルトがベットにいた。
ナルトは頭だの、腕だの包帯の量が半端ない。

重症じゃねーか！！！おい！！

しばらくするといるか先生が来た。

そして、屋上に行く。

いるか先生「腕はどうだ？」

おはな「さあ・・・でも予想だとしばらく使えなさそう。」

いるか先生「あのな・・・ナルトが九尾だってことはナルトに言っちゃだめだぞ。掟になったしな。」

おはな「分かってる。じゃああたしも腕がナルトのせいで使えないとかいうのも言っちゃだめだよ。」

いるか先生「火影様に話して置くよ。」

で次は医者からの呼び出し。

なんなんだよ！！

呼び出し多すぎだろ???

医者「右腕の事です……手術するにはまだ早いです。」

・
・
・
・
・

何???

このベタな感じ……

悪かったな!!!

by 作者

あの体力が足りないからでしょ。

医者「あと6年になつたら大丈夫でしょう。」

疾風伝始まる1年前やないか!!

そうしくんだんだよ!!

b y 作者

でベットに戻って女神に話した。

女神「なんか大変な事になっちゃったね。でも治せないや」

ああーそうかい。

女神「まあ・・・ガンバ！それじゃ。」

えええ????

それで終わらす気!??

!!

はできるけど、

お箸も????

クナイも??

鉛筆とかも???

嘘でしょお？

ク
ッ
ソ
ー
ー
ー
ー
ー
！
！
！
！
！
！
！

はぁ・・・まあ頑張る!!

どうやってだよ!!

ナルト「ん・・・」

目が覚めた!!!!!!!!

おはな「おはよー!ナルト!!」

ナルト「おはよー!おはなその腕どうしたんだってばよ??」

うわー！ー！ー！

コイツさっそく痛いところについてきたー！ー！

おはな「ちょっと事故ったの。」

ナルトの頭なら騙しとおせるー！

ナルト「そうなのか。」

ほら見ろ。

しばらくすると、サクラとサスケが見舞いに來た。

ナルト「サクラちゃんーん？」

サクラ「あんたの見舞いじゃないわよ！？おはなの見舞いよ！！」

ストレートに言った!!

あーあ けっこう落ち込んでるよお??

サスケ「大丈夫か??」

おはな「うん。けど手術するには6年待ってて。」

サクラ「それ・・・大丈夫って言わないんじゃない??」

サスケ「かなり重症だな・・・」

おはな「まあ、1週間したらアカデミーに戻るつもり。」

ナルト「俺もつてばよ!」

ベタすぎだろ!! (後書き)

次回一気に四年後・・・原作が始まる!

・・・かも (<|>)

女神勝手すぎだろ!! (前書き)

はい!!

いきなり原作に飛び込みます!!

年月もすぎますが・・・。

女神勝手すぎだろ！！

あれから、4年たった。

成長っていつでも、髪は前のまま。
背は少し伸びて、左利きになった。
腕は包帯をしている。

んである日の事。

あたしが買い物しようと歩いてるとイタズラしようとしているナル
ト発見！

おはな「何しとんじゃあ！……！」

必殺！水びたしの術！！

勝手に作った術です。ニートすぎます。女神からもらったなんでもあり能力っす！！

ナルト「つ．．．冷たい．．．」

おはな「また、ラーメン屋のおっちゃん困らせて．．．謝れ!!」

ナルト「ごめんなさい．．．つかおはなお前今日アカデミー休むんじゃない?」

おはな「病院帰りに、買い物しようと思ったの!!」

で別れて家に帰ると、女神が話かけてきた。

女神「お久ー！強いのに修行してんのね。」

おはな「何の用??」

女神「実はですね・・・書類にジュースこぼしてしまいまして、あなたのここに落ちる
前の記憶ができてしまい、しばらくしたら会うことになってる白と
いう男の子が
あなたと双子という設定に・・・」

おはな「何してくれてんの!??ってか苗字違うし!」

女神「それはあたしが白の苗字を椿山にしといたから大丈夫!」

おはな「ええええええ??」

女神「白と過ごしたあたしが作った記憶を今から入れまーす!」

おはな「ちょ……そんな勝手に……」

ぽん！！

白という顔、
お母さん、
悲しい事実・
・
・

全部入ってきた。

ってか、勝手すぎる・・・

家を飛び出して森に行く。

女神が作った過去といえども、こんな過去悲しすぎる・・・

涙が出てきてしまった。

落ちてきて・・・いや、この忍びにきて初めて泣いたかも。

白に早く会いたい。

しばらくしたら会えるけど・・・

会いたい。

サスケ「おはな?？」

ギク!!

急いで涙をふく。

泣いてるとこ見られてくない。

おはな「何??」

あたしは笑う

サスケ「いや・・・なんでもない。」

おはな」「じゃあね！」「！」

家に急いで帰り、風呂、ご飯を終わったあと、布団で泣いた。

くっそー！！

女神のヤツ、いい話作りやがって!!

次の日・・・

卒業試験は今日だ。

ナルト「あれ??おはな目赤くない?」

おはな「あはははは!!き・・気のせいじゃなくて!!」

もう!痛いところいてくるなあ・・・

サスケに目を合わせ、
言わないでのサインを送る。

サスケはうなずいた

イルカ先生「今から卒業試験を行う、なお試験内容は陰分身の術だ
！！」

あたしはクリア！！

ナルトは落ちた。

ナルト・・・また落ちたか・・・

いつもわざと落ちてたけど、今回は大丈夫だからマジ目にした。

親のいるみんなはちやほやされてたけど、中には変な話している親もいる。

おはな「ナルト・・・」

ナルト「大丈夫ってだよ。じゃあな。」

で家帰りました。

あたしの出る幕じゃないし！……！

女神勝手すぎだろ!! (後書き)

次班分けっす!!

もうめちゃくちゃだな。おい！（前書き）

あはははは。

いま思ってたんだけど、九尾って12年前に現れたのに
4年前ってのはやりすぎたかな???
まあ、いまさらなんなので、班分け行きます（＾o＾）

もつめちゃんくちな。おい！

次の日

あたしは額あてをしてアカデミーへ行く。

額じゃなくて、カチューシャにしてるけど・・・

アカデミー

扉を開けると、なぜかナルトがいた。

パタン。

おはなは見なかった事にした。

おはな「よし、もう一度。」

・
・
・
・
・
・
・

ガラッ！！

おはな「・・・・・・・・見間違いかな・・・・・・・・ナルトがいる。」

サクラ「おはな、見間違いじゃないわよ。まあ・・・・・・・・驚くのも無理ないけど。」

おはな「ま・・・・・・・・いつか。おはようナルト！卒業おめでとー。」

ナルト「おはなごめん!!」

いきなり土下座した。

ナルト「その腕……俺の「いいよ。そんなこと。」……え？
」

おはな「思っていないから気にスンナ。ほら！席に着かないとー！」

ミズキのやろーだな。

いの「サスケ君の隣はあたしよ!!」

サクラ「何いってんのよ!?!?!あたしだしい?!!?」

はい！！ケンカ

おはな「・・・めんどくさい事してんなあ・・・」

サスケ「シカマルみたいな事言っなよ。」

おはな「あんな奴と比べないで！！サスケ！！あんなサクラといの
の両側に座れば？？？」

頭いいあたし！！

シカマル「だれがあんな奴だとお？？」

げ！！出た！！

おはな「てめえの事だよ！！このくそじじい！！」

シカマル「お前みたいなばあに言われたかねえよ！！」

おはな「やんのかよ??こらあ!!」
シカマル「こっちのセリフだあ!!」
「」

ナルト「レベル低!!!!」
「」

「」お前に言われたくねえよ!!!!」
「」

!!!

おはな「何はもってんだよ!!」

シカマル「うっせーよ!!」

あたしとシカマルは仲が悪い。

2人ともIQが同じだから。

勝負したけど今は100勝100敗という引き分け。

おはな「勝負するかあ??あ??」

シカマル「めんどくせえよ!」

突然女子の悲鳴が聞こえた。

おはな「何!?!???」

どうやら、サスケとナルトが唇接触事件が起きたらしい。

興味なし。

シカマル「やんのかよお??おい!!」

おはな「黙れ!!やるか!?!おお??」

イルカ先生「シカマル!おはな!そこまでだ!!」

おはな「ちッ!!」

シカマル「次はねえからな!!」

とりあえずどこかに座ると、サスケが隣にきた。

サスケ「まったく・最悪だぜ・・・つかファーストキスはおはながよかった・・・」

おはな「ん??なんか言っただ？」

ナルト「・・・鈍いなあ。」

サクラ「同感。」

そして

ナルト あたし サスケ サクラ

の順に座っている。

いるか先生「まず、みんな今日から一人前の忍者だけど、三人一組が基本だ。」

チームは力が均等になるよう、先生が勝手に決めた。一組だけ、4人の班がある。」

で次々と班が呼ばれていく。

おはな（シカマル以外なら誰でもいいや。）

ナルト（サクラちゃんとおはながいたら最強だな！あとは・・・サスケ以外ならだれでもいいや）

サクラ（サスケ君と？）

サスケ（おはなと・・・あとは足でまといが増えるだけだな。）

いるか先生「次7班、うずまきナルト、春野サクラ、うちはサスケ、
椿山おはな。」

児童A「先生！！均等じゃないと思います。」

いるか先生「決まった事なので。次八班。」

んで休憩が終わったら、教室また来いと。

おにぎり食ってるサスケ発見！

おはな「おにぎり好きなの??? いる?」

今日の昼飯がたまたまおにぎりだった。

サスケ「いいのか？」

おはな「うん。作りすぎたから、誰かにあげようと思ってたし。」

照れながら食ってた。
かわいい？

サスケ「うまい。」

おはな「良かった！」

ちなみにあたしはわかめ味が好き。

サスケ「良かったらまた作ってくれないか？」

おはな「いいよ！ねえサスケって甘い物嫌いって本当？」

サスケ「ああ。」

うそー！

あたしなかったら生きていけないぐらい好きー！！

サスケ「ところでそのリスどうしたんだ？」

あたしの肩にいるリスに気づいたらしい。

おはな「ああ。さっきがしてたから、可愛いそうだし・・・」

サスケ「本当動物好きだな。」

おはな「うん！ーじゃまたあとで！」

サスケ「ああ。」

しばらくして・・・

待ってたけど遅いから本を読み始めたあたし。

サクラ「ちょっと!!おはなそれ『恋心』じゃない!!」

おはな「うん。あたしがいま読んでんのは中。上中下そろえたの！
」

サクラ「あたしが持ってんのは『恋心〜あれから〜』なの！
」

おはな「嘘！！今度かして！！
」

サクラ「いいよ！！あたしもかして！！
おはな「いいよ！！
」

ナルトが黒板消しをドアにしかけた。

サクラ「ちょっと！やめなさいよ！」

サスケ「そんなトラップにひっかかる上忍がいるかよ。」

おはな「右に同じ。」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

ガラッ
!!

普通にひっかかたあ
!!!!!!!!!!!!!!

大丈夫なの！？

上忍「……まああれだな、お前たちの第一印象は苦手だな。」

もつめちゅくちゅだな。おい！（後書き）

下忍試験！??

場所を移動しての事

上忍「えーとりあえず、自己紹介な。名前と、好きなもん、嫌いなもん、夢」

おはな「そういうもん、先生からするもんじゃない。」

サクラ「そーよ、そーよ!!」

上忍「俺？俺はだな、はたけカカシ。好きなのは、まあいろいろ嫌いなもんはー
別にない。夢って言われてもなー!。」

サクラ「結局分かったの名前だけじゃない!」

おはな「自分で言ったくせに、まともな答えないじゃん!!!」

ここから暇だから自分の番までリスと遊ぼ!!

カカシ「じゃあ次、右のお前から。」

ナルト「俺はうずまきナルト、好きなのはカップラーメン、もっと好きなのはイルカ先生とおはなにおごってもらった、ラーメン！！嫌いなのは、ラーメンを待つ3分間！！」
将来の夢は火影になって、里のみんなに俺を認めさせる事！！あとおはなに勝つ事！！」

カカシ「（アホだな。）はい次。」

サクラ「春野　サクラ　（好きな物つか人&夢はサスケの方を見て）
嫌いなのはナルト。」

ナルト「そーーんなぁ!!!!」

カカシ「（この年頃の女の子は忍術より恋か。）はい次！」

おはな「椿山　おはな　好きなものは動物と甘いもの!! 嫌いなのは時間&約束を守らない人
あと動物&人をいじめる人! 夢は・・・シカマルに勝つ事と、生き別れの弟を探す事、
あと、お父さんを絶対殺す。　ここ真顔」

カカシ「（かなり秘めたチャクラを持っている・・・怒らすと怖い

タイプだな。
最後お前!!」

サスケ「名はうちはサスケ 好きなものは・・・1個ある。嫌いなものはいろいろ
夢なんて言葉で終わらすつもりはないが、ある人物を殺す事だ。」

カカシ「(さすがうちは一族の事はある。)(じゃ明日演習な。」

サクラ「ちょっと!演習ならアカデミーでやったわよ!？」

カカシ「明日、第3練習所で下忍試験を行う。合格しなかった者は

アカデミーへ戻ってもらう。」

おはな「やっぱ???」

ナルト「どういう意味だってばよ!?!」

おはな「卒業しても人数をへらすプチ試験なもんよ。確か全体合格は9名だけだったような。」

あ!!!

原作言っちゃた!!!

カカシ「はい！正解！じゃ明日の朝5時集合な！朝飯は食うなよ。
吐くぞ。」

家

朝飯は食べる。

ちなみに横の部屋、紅さんっす！

まだ子供だからって言って結構お世話になってる。

次の日

5
時

ナルト「眠い。」

サクラ「おはよう。」

おはな「おっはー！」

で本を読む。

あ！！

おはな「リスちゃん！森におかえり。」

帰らない。

どうして？

いつも鳥やウサギ、シカとか助けても森に戻り、森にいる時よって
くることは多い。

帰らないってのは初めて……

おはな「……まいつか！」

リスだし。

11時ごろ

本全部読み終わりました。

カカシ「諸君、おはよう。いやー実は目の前に猫が通りかかって・
・」

三人ともにらむ。

おはな殺気崩壊中。

どんな猫がいたらこんな時間になるのかしらあ?????

カカシ「よし！12時セット完了！いいか??お昼までに俺からの鈴を奪え！
できなければ、あの丸太にくくりつけた上俺が目の前で昼飯食うから！」

サクラ「でも、なんで鈴3つなの？」

おはな「サバイバルよ！つまりあたしたちに仲間割れさせようとしてるのよ！」

カカシ「うーん、鋭いね！（恋は全然だけど）じゃよい・・・はじめ！」

カカシ先生は本を取り出した。

イチヤイチャパラダイス……

おはな「ふざけんな！13歳を前に18禁っぽい本を読むな！！！」

飛び蹴り

カカシ「ごめん。」

地味に避けた。

たのしそうじゃない？

下忍試験！??（後書き）

次へ続く

なんか合格もらった。(前書き)

はい！めんどいから1つ訂正ここでいいます！

13歳って言ってるけど12歳だから！！

ナルトと同じ年っす！！

もし、間違ってたらずう思っていてください！！

すみません(T|T)

でわどうぞ(^o^)

なんか合格もらった。

あーらまあ、こりゃ楽しい演習になりそうな事？

おはな「……………マジめに行こうかな……………」

うーん…………

真面目にせんと、アカデミーというのはキツイなあ…………

!!

じゃあ！本気モード1～10の中で3を出そう！

ちなみに5を行くと、目つき変わります。

うし！！

おはな「雷盾！！雷弾の術！！」

m なんか勝手に作っている技があります。ご了承くださいm――)

カカシ「おお!!こりゃ本読んでる場合じゃないなあ! (しかも、印が早い)」

しかし、もろにくらってたけどダメージあんまないっばい!!

うーむ・・・

地味に強い!!

作戦を考えるため、ここは引こう!

おはな「ドロン! っとな」

さて逃げてきたのはいいが、どうするか・・・

サスケはナルト、サクラを足手まといに決めて、サクラはサスケの事ばかり

考えて、ナルトはバカ一直線に走っている。

まず、誰か1人でも探さなきゃ！

じゃないと、カカシ先生の思う壺だわ！

「ぎゃああああ
!!!!」

「うわああああああ
!!!!」

・
・
・

はあああ・・・

絶対もうダメだあー！！

考えるより、ぱぱっとみんなを探して合流したらよかった！

行ってみたら、サスケがカカシ先生に押さえつけられて、ナルトは
なんか

丸太にくくりつけられ、サクラは見てる。

おはな「最悪の状況じゃん。」

サクラ「え？」

もう、お前らバカだ！！

カカシ「まったく、何もわかってないなあ。」

おはな「そうよ、サスケが人質になったら、サクラ、ナルトを殺せ
って言われてどんだん
命が奪われていくの。」

カカシ「そう、忍者の世界は厳しい。それにはつきり言ってもうお
前らダメ。」

チームワークばらばらすぎ。ナルトは一直線に走ってきてサクラは
サスケの事を
考えすぎ、サスケは押しでまといだと思い込んで、おはなは気づい
ても

実行しなきゃ意味ない。つまりお前はみんなの心配しすぎ。自分の
心配もしろ。」

「
「
「
「
・
・
・
・
・
「
「
「
「

カカシ「まあ、昼飯食ったら再開だ。午後からは鈴を隠してあるのを探せ！」

ナルトは1人昼飯食べようとしたから、お前はなし！あと全員食え！」

ナルト「そんなあ——！！」

でカカシ先生は消えた。

ナルト「別に腹なんか減ってないってばよ！」

ぐうう・・・

おはな「お腹は正直ね。」

あたしは弁当を差し出す。

ナルト「え？」

サクラ「ちょっと!!！」

おはな「大丈夫。あたしは朝ごはん食べてきたし！！お昼くたばってしまったら困るし！」

サスケ「今、アイツの気配はしない。食うならいまだ。」

んで食ってたら。

カカシ「ルール破つたなあ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

ナルト「ひいひい！！！！！」

カカシ「お前らどうなるか分かってんだろな？？」

おはな「あたしたち、チームメイトでしょ！！！」

サクラ「そーよ！！4人で1つじゃない！！！」

サスケ「その通りだ！」

ナルト「そうだってばよ！！！」

カカシ「はい！合格！！」

「「「え？？」「」

カカシ「ご・う・か・く・」

サクラ「な・・・なんで？？」

カカシ「今までの奴等は俺のいう事をしたがってた。でもお前たち

は逆らった!」

よく分かんないけど・・・とりあえず、合格もらいました!!

なんか合格もらった。(後書き)

最後、投げ出しっす(^o^)

過去編（前書き）

いきなり書いてみました（＾Ｏ＾）

過去編

いま思えばサクラは今みたいな元気?? な子じゃなかった。

自己紹介されしばらくした後。

まず、1人でイタズラしていたナルト発見！

そのあと、いのとかも友達になる。

公園

なんかムカつく子「サクラ！あんた最近調子乗ってんじゃない？？
ねえでこりんちゃん？」

したっぱ？「そーよ！」

したっぱ？「マジうざい！ー！」

ナルトはこっぴうの初めて見たらしくあたしに隠れた。

サクラ泣きかけてるじゃない!!

それに・・・

あたしもおろちまるや親父にあんな事されたし・・・

おはな「ちょっと！！何してんのよ！！」

みんな一斉にこっちを向く。

なんかム力つく子「何って見たらわかんでしょ！！？？」

おはな「だからってなんでいじめてんの？でこりんって．．
あんたなんか外見よくても性格くさってるわよ！！！！！！」

なんかム力つく子「なんですって???!!あんたもサスケ君に気に入られてる
からって調子にのんなよ!」

おはな「乗った覚えなんかないけどね!」

いきなりクナイを投げてきたのであたしは素手で受け止めた。

おはな「やんのかよコラア!」

クナイを顔の横ぎりぎりまでに投げた。

「「「いやあああ！……！！……！！……！！」」」

と言って逃げた。

おはな「次したら飛び蹴りかますからな!! サクラ、大丈夫??」

サクラ「う・・・うん。」

そこで、いのとかいろいろ来た。

過去編（後書き）

短くてごめんねごめんねー！

調子に乗ってごめんなさい（<_>）
（――）

タズナさんを波の国まで連れて行こうぜ！（前書き）

はい！更新久しいなあ・・・

もう一個の方も更新しなきゃ・・・

タズナさんを波の国まで連れて行こうぜ！

んである日

突然ですが、朝起きたら枕もとに

家族の写真あった。

額縁つきで

おiiiiiiii!!

今頃サントさんのつもりか!!?

季節はずれ!!

任務後

任務は逃げ出した猫をと捕まえるのだった。

依頼主見たけど、あれじゃ逃げ出したくなるよ。

おはな「また逃げ出すよ、あれ。」

ナルト「俺もそう思っつてだよ！」

カカシ「まあ、もういいじゃないか。」

火影のじいちゃん「で次の任務じゃが・・・」

ナルト「Dランクはいやってばよ!!簡単すぎであきたってばよお!!」

おはな「ただこねるな!飽きたのはあたしもなんだから!」

サスケ「おいおい・・・」

火影のじいちゃん「そこまで言うなら・・・Ｃランクの任務を受けさせよう。」

「！！！！」

火影のじいちゃん「ある人を波の国まで護衛する事じゃ。」

ナルト「えー？」

カカシ「文句言っな!!」

その人が・・・

タズナというじいだった。

•
•
•
•
•

うわーー・・・

どういえばいいんだろ・

なんか地味

タズナ「ガキが大丈夫なんかあ??超不安じゃ。」

カカシ「まあ、私もいますので。」

おはな「悪かったわね。超たよりなくて。」

タズナ「特に一番背の低いやつ！」

ナルト「ん???誰だつてばよ???」

サスケ「150cmぐらい、あたしとサクラ「148cm、ナルト「145cm」

ナルトの事ですな。

ナルト「俺か!?!?」

サクラ「見たらわかるでしょ。」

うん。

ちびでたよりねー。

なんだかんだで出発する事に！

リュックに一応写真入れた！

母性ってもん？？

意味ちげーよ！！

んで歩いてたらなぜか水たまり発見。

にゃり！

おはなはナルトを水たまりの方へ突き飛ばした

ナルト「おわ!!」

ナルトは水たまりをふんだ？

水たまり「い！」

おはな「あーれ？？おかしいなあ！水たまりが声だすなんてー！。
」

クナイ投げよー！

と思ったら水たまりが変形した

人に変わった。

ナルト「なーにぃ!!????」

サクラ「うげえ！」

サスケ「おはなお前！」

カカシ「うーん・・Sだねえ！」

おはな「ちッ！！」

変な奴「くっそー！やりやがったな！クソ女！」

おはな「そりや痛いだろうなあ。ナルトが踏んだところお前のタマタマのトコだもん。」

ナルト「え？？」

といいナルトに変な奴は引っ掻いた。

！

おはな「気を付けて！あの爪毒がある！！」

とかいい自分はその2人組をクナイで気絶さしたんだけど。

サスケもナルト助けてたし。

サスケ「よおケガはねえか？ビビり君。」

ナルト「なんだとお！？？」」

カカシ「あまり動くな。毒が回る里に戻って毒抜くぞ！」

いや・・・

あたし一応医療忍術使えるけど・・・

綱手さんに教えてもらったしね。

でなんか臭いセリフ言ってた。

おはな「あのねえ・・・あたし医療忍術使えるんだけど。」

ナルト「え?？」

カカシ「確かに毒は抜けたけど、次は出血大量でやばいぞ。」

ナルト「えーーーーー!?!」

カカシ「手みせてみる。」

とかいいつつ真顔でカカシ先生見てた。

多分九尾の力でもう治りかけてると思う。

ナルト「先生俺って大丈夫なの???さっきから真顔で見てるけど・
」

カカシ「まあ大丈夫だろ。」

包帯を巻いてたな。

つかあたい、右手の上ら編もう綱手さんに治してもらったよ。

タズナさんを波の国まで連れて行こうぜ！（後書き）

はい！いつもありがとうございます！

感想はやさしくお願いします（<―>）
ガラスの？なんで！

再不斬現る！！（前書き）

真面目なタイトル（笑）

でわどづぞー！！

再不斬現る！！

今度はタズナさんにカカシ先生が本当の目的を聞いていた。

簡単に説明すると、波の国は大名までお金を持っていない貧しい国で
タズナさんはある人物に命を狙われているらしい。

225

その理由が橋をかけようとしているから。

って事らしい。

・
・
・
・
・

自己中のな考え!!

で船に乗って降りて、また森を歩いていると・・・

抜け忍の、再不斬さいざんが出てきた。

カカシ先生は写輪眼を開けた。

まあ、先生がどうかしてくれるのを期待して、あたしはタズナさんを

みんなで守ろう!!

カカシ「おはな！コイツをやっつけろ！」

って、あんたさんもう水の中に・・・

おはな「捕まるの早えーよ!~!」

ナルト「いや、おはな結構ボーっとしてたってばよ!?!?」

おはな「ナルト!サスケ!あたしは再不斬の相手おとりになるから、カカシ先生を助けなさい!」

サクラ「タズナさんはまかせて!!」

おはな「ええ、任せるわ!」

で相手をするわけだが・・・

おはな「忍法！霧払いの術！」

うん！勝手に作り習得しといてよかった！

再不斬「何？？？」

おはな「何回しようと同じ！！ってか霧を出させなくしたのよ！」

再不斬「っち！水盾水流弾！！」

おはな「雷盾雷流弾!!」

水と雷が混ざった!!

逃げる!

みんなほっといたままだった。

カカシ先生は一応救出したので、あとはサクラと一緒にタズナを守る！

再不斬はカカシ先生にやられようとしたけど・・・

グサ！！！！！！

「??? 本当だ。死んじゃった。」

!!!

あの声・・・どこかで聞いたことが・・・

サクラ「どうしたの???おはな?」

おはな「ううん、なんでもない。」

そんなまさか……

カカシ「お前は追い人か?」

仮面の人「おはな??. そうです。僕は追い人です。」

でなんとらんたら話してどっか行った。

やっぱあの仮面の子・・・

白じゃ・・・

カカシ「元気よく行くぞ!!」

つ
と
い
っ
た

瞬間カカシ先生は倒れたのだった。

修行は木登り???ってもうそんなのつくにできとるわい! (前書き)

あたしは大阪の人なんです!
だからどうしたって??

今日は台風で臨時休業なのだー! (^ o ^)
学生にとっちゃパラダース!」

で今回の話はおはなの過去を書いたのです!

見たくない人はできるだけ飛ばしましょう。

修行は木登り?? ってもうそんなのつくにできとるわい!

まず、タズナさんの家に行く。

正直ボロボロ・・・

いやそうだったと思ったけど、どことなく懐かしいのは木の葉の里に落ちてくる前、住んでた家に似ている。

ナルト「うわ！すげーぼー」

バシン！！！！！！！！！！

ナルト「いつてえ〜！何すんだってばよ！」

おはな「これからお世話になるんだから、失礼な事言っな！！」

サスケとサクラは何も言わなかった。

でかれこれ、3日ぐらい寝てました。

医療忍術でけがは治しといたけど、写輪眼によるチャクラの消費は
いくらあたしでもできないからねえ・・・

ま！カカシ先生が寝てる間考える時間もあつたけれど・・・

もし、あの仮面の子が追い人だとしたら・・・

あたしは・・・

白とあたしは、双子の女として生まれた（原作崩壊）

その家は少し貧乏だったけれど、とても楽しかった。

あの日までは――・・・

ある日、いつものように白とあたしが雪だるまを作って遊んでると
白は解けた雪を、ふしぎな力で雪に戻し雪の結晶を作った。

ためしにあたしもすると、できた。

それをお母さんの見せに行くと、いきなりぶたれた。

意味が分からなかったが、泣きそつな白をなだめまた2人で遊んでた。

すると、次の朝

家に大蛇丸が来た。

そして、お父さんはあたしたちを殺そうとした。

大蛇丸はお母さんを殺し、お父さんは白を殺そうとしたが、あたしがかばおうとしたら、

大蛇丸「あなた・・・おはなちゃんだったわね。いいチャクラを持っているわ。」

あなたはくノ一になりいずれ私が迎えに行く。そして私の器になりなさい。妹の命を背負いながら」

おはな「白！逃げなさい！」

白「姉さん！！！」

それで、木の葉の里に落ちた。

もしあの時、あたしが白の手を握って一緒に里に来たら・・・

追い人なんかなくてよかったのに・・・

カカシ「おい！おはな修行すんぞ！」

おはな「はい！」

なんの修行？？

つて木登り!?!?

そんなのできるわい!

一応走りながらしたけど・・・

てっぺん行った。

カカシ「ありゃー！早い！」

飛び降りてあたしは言った。

おはな「先生・・・あたし水面歩行も9歳の時からできんですけど・・・」

カカシ「そりゃすまん！タズナさんの護衛な！」

・
・
・
・

はあ
・
・
・

もう一度白にあって、木の葉の里の連れ戻したい。

カカシ「あの・・・話聞いている??」

おはな「行ってきます。」

修行は木登り???ってもうそんなのつくにできとるわい! (後書き)

はい!

一応木の葉の里に行こう!

って考えてます!

再不斬を・・・

カトーをどうするかね・・・

プロフィール(前書き)

いまさら、これかよ!???
と

思った人!!!

正常です (^ o ^)

プロフィール

椿山 おはな

性別 女

年齢 ナルトと同じ

容姿 目の色、髪の色は赤のかった茶色で、髪の長さは肩につくぐらい。

前髪は7：3。(いま風の)

額あてはサクラと同じく、カチューシャっぽくしている。

性格 やさしく、少し天然、鈍い（恋の方は）

かしこく、運動力もバツグン！

里でなぜ、ナルトと同じ3回もアカデミーの卒業試験が落ちたのは、ナルトの為思つての事と考えられている。

シカマルと仲がえらく悪い。

ナルトがご飯を食べているのはカップラーメンだけと知った時から家を訪ね、見た所部屋汚い、洗濯物やまずみ・・・

それを見て怒り、以来毎日家を訪ねご飯、掃除、洗濯すべて行っている。

里のみんなは、おはなはナルトと結婚するのか、シカマルと結婚するのか

賭けをしている者までいるらしい。

プロフィール（後書き）

恋の方は、あたすがちゃんと考えてます！！

それはまたそのうち、小説に書くので楽しみに？

SIDEくそ多い(笑)(前書き)

はい!!

今回はSIDE多いです(ゝ_ゝ)

でわとびや。

SIDEくそ多い(笑)

今日から、タズナさんの護衛だあ。

サクラもいる。

と、いうものの……

結構ひま。

だって!!

タズナさんが橋建ててんの見てて、周りを見ても再不斬や仮面の子

(絶対白！)、ガトウいないし。

ってか、仮面の子が白だとしたら、いろんな意味でどっなってんの
????

あの時、離ればなれになりそのまま街やへんなところろろしてる
うちに、再不斬と
会って……

うーん……

じゃあ、ガトウを殺して再不斬と白を里に連れて帰る！！

いいんじゃない???

おはな「よし！！これだあ！！！」

サクラ「！！??ちょ・・・どうしたの??」

周りを見るともう夕方で今から解散っぽかった。

SIDE
サクラ

おはな「ありゃ・・・もう夕方?」

サクラ「最近、おはなおかしいわよ?どづしたの?」

最近、おはなはおかしい。

そう思っているのは私だけじゃなく、カカシ先生やサスケ君それにナルトまで
気づいている。

あの、仮面の子に会ってからおかしいの。
知り合いなのかしら???

SIDEアウト

タズナさんの家に帰る途中、サクラは鞆をひったくられそうになった。

あたしはリュックだったから大丈夫だったけど

家へ帰ると、サスケしか帰ってない。

昨日、タズナさんの孫の・・・名前知んないや。

なんかその子と、ナルトが言い合いしてた。

悲劇のなんとか、かんとかって・・・

サクラ「ナルトは?？」

サスケ「まだ、森。」

おはな「そのうち、帰ってくるでしょ。」

SIDE
ナルト

「もしもし、こんなところで寝てたら風邪ひきますよ??」

ん・・・???

ナルト「誰だつてばよ??」

目を開けると、おはなに似てる人がいた。

それに、サクラちゃんよりかわいい。

それじゃ、今まで考えた事なかったけど、おはなもかわいいのかな？

「どうかしました？」

ナルト「姉ちゃんの顔とふいんき・・・俺のチームの子にそっくりだつてばよ!」

「それはうれしいですね。」

うーん・・・

この子おはなと違い、黒い目に黒い髪は腰ぐらい??

おはなは髪短くて、茶色っぽいし・・・

SIDE
アウト

サスケがナルトの様子を見に行ってた。

で帰ってきた。

ナルト「おはな!！」

おはな「何?？」

ナルト「さっきさ、おはなに似た黒い髪のいろの人に会ったってばよ!！」

白！？？

おはな「どこで！？？」

ナルト「え？？森で・・・だけでも帰った。」

ち！！

使えないなあ！！

ナルトはあのまま寝てしまった。

橋

しばらくすると、深い霧が出た。

SIDEくそ多い(笑)(後書き)

次回、どうなる事やら・・・

血継限界（前書き）

戦闘ってかマジな話っす。

嫌いな人は回れ！右！！！！

嫌いだけど、見てやるよ。

またひまだから見る方、そのまま下へ！！

血継限界

霧が出てきたので、カカシ先生があたしの顔を見てうなずく。

「忍法霧払いの術！」

辺り一面深い霧がすべて晴れた。

もちろん、再不斬と仮面の子がいる。

再不斬は顔をしかめながら言う

「ucci!やはりいるな・・・」

「これで、霧は無意味ですね??再不斬」

これ言ったのあたし。

うははは!!

見てあの顔!!

凶星だよ!!

「サクラ、サスケ!タズナさんを守れ!おはなお前はあの仮面の子をやれ

俺は再不斬をやる。」

・
・
・
・

「カカシ先生、戦うのは待ってください。仮面の子と話がしたいんです。」

まだ間に合う。

「同じですね。僕もあなたとお話したいんです。再不斬さん僕からもお願いします
少し待ってください。」

そついい仮面の子はあの印をした。

「あなたもわかりますよね??」

「もちろんよ。」

犬、猿、牛の印を結び

「氷遁 氷竜!!」

「な!!」

再不斬は驚いている

術を発動したのはあたしの方が早かった。

そして仮面が割れた。

「お前は・・・あの時の姉ちゃん!!」

気が付くと、ナルトがいた。

「白・・・久しぶりね、やっぱりあなただったのね。」

「姉さん・・・もう終わりにしましょう。お互いつらいです。姉さんは変わってませんね。
あの時と変わってない。急所が10cmはずれてます。」

そついい白は泣き、あたしのところにきて抱き着いた。

「白・・・あなたも変わってない・・・泣き虫のままね。」

しばらくこの状況でいた。

ナルトが何か言おうとしたけど、カカシ先生が

「今は黙ってる。」

といった

数分し白は泣きやみ言った

「再不斬さん・・・僕は・・・分かっている」・・・え??」

「あれがお前の言っていた、助けてくれた双子の姉さんだろ。
あの術を見て確信した。お前と同じ血継限界の生き残りだろ」

「な!!」

「血継限界??」

「・・・」

「双子お!!??」

上から順に、カカシ先生、サクラ、サスケ、ナルト

ナルト・・・

つっこむトコ違うだろ。

「姉さん・・・父さんは大蛇丸に殺されました。」

やっぱりね。

カカシ先生は言った

「おはな、お前過去に何があった？言える範囲でいい。言ってくれ」

あたしは話した。

親に殺されそうになったこと。

白をかばって、大蛇丸に木の葉の里へ飛ばされたこと。

いつか、大蛇丸があたしを迎えに来て器にされる事

「・・・と言うわけです。先生あたしはガトウ殺して、白と再不斬とともに木の葉の里へ帰ります。無理だというならあたしをいますぐ殺してください。」

ナルトはびっくりしてる。

「カカシ先生！！いいじゃないか！！3年も別れてたんだってばよ???

俺はおはなの意見に賛成だつてばよ！！」

続いてサスケ

「俺も賛成だ。あいつはあんまわがまま言わねーだろ。（ここで殺されちゃ困るしな）」

サクラ・・・ってかもうカカシ先生・・・空気読んでね??

「あたしも!!」「あー分かった分かった!!俺は別に構わないけど、判断を下すのは火影様だ。それだけは忘れるな。」

といい、ガトウのお出ましだったけどムカついたからクナイで心臓狙って
人生おしまい?

まあ、波の人間が避けれるようなスピードだったし

（写輪眼でも見えなかった・・・おはなお前は立派なくのーになる）

で、タズナさんの家に帰ったらガトウがいなくなって橋も完成したので

明日帰ることになった。

いなりとナルトの話も見れて満足!!

(写輪眼も開眼できたってか白?だったけど、おはなに似てるなあ・
・まあでも俺は
おはな派だな。)

「サスケ君、姉さんが欲しかったらまず僕に勝つことだね」

「!!!／／」

（姉さんがいい人なのは知っています。けど・・・ナルト君はどう思っているのかな???
姉さんの事・・・僕は姉さんと違って胸は平らだし・・・）

「白??」

「なんでもありません。」

（・・・ナルト君、姉さんによく抱き着くなあ・・・今だって・・・
うう・・・）

「ナルト君は姉さんのことどう思っているんですか？？」

は！！

つい口が！！！！

「うーん・・・お前と同じ姉ちゃんって感じたな・・・」

ほ！！！！

「なんでそんなこと聞くんだったよ?？」

「いえ!別に」

(このウストラトンカチが・・・)

(バカ!!)

(コイツおはな同様自分のことになると鈍感だなあ)

(ナルトと白か・・・いいんじゃない??)

(コイツやつは超ばかじゃ!!)

みんながこう思うのは無理もないだろう。

「白？あとでナルトの好きな物教えたい。」

「姉さん!!」

血継限界（後書き）

次回里へ帰ります!!

再不斬と白の今後を書いて中忍試験へGOです!!

帰ってきたぞー！ー！ー！！！！！！（前書き）

はい！！

いよいよ中忍試験・・・

かもね（TーT）

帰ってきたぞー！！！！

次の日

あたしたちはガトウも倒し、橋も完成したので木の葉に帰ることになった。

白や再不斬も一緒にね！！！！

「今までありがとう。おかげで橋も完成したこれからは超安心じゃ

「!!」

んでカカシ先生とタズさんがなんか話していて、ナルトといなりが別れをおしんでいた。

橋の名前がナルト大橋

実際見てこれは実に笑えた（　^o^　）

tu
e

白と再不斬は、木の葉に住む事になった。

再不斬は暗部へ

白は働く

あたしと白は一緒に住めるようになり、喜んだ

そして、木の葉から帰ってしばらくしたある日

あたしと白は晩御飯を買いに行こうと思ったとき、曲り角でもめあ
いをしていた。

ナルトにサスケにサクラと木の葉丸たち
それに・・・

我愛羅とてまり、カンクロウ・・・

早いなあ・・・

もう中忍試験かあ

「あんたら何してんのぉ??」

知ってるけど聞いた（笑）

「おはな!こいつら木の葉丸を・・・!!」

「それに、なんでか砂隠れの忍者が・・・」

「サクラ、なんで砂隠れの忍者がいるのかは中忍試験の忍者だからよ」

「正解じゃん。」

「おい、その女名前は？」

「あたし??あたしは椿山　おはな　あなたは?？」

「てまりだ。お前・・・強いチャクラがプンプンしてる」

「それはどうも でその黒い奴、その子離しておげなさい。今のうちにしといた方が
見の為だけど？」

殺気をカカシ先生以上に出しました。

あははは!!

味方のナルトやサスケ、それに白でさえおびえている（笑）

「で・・・話聞いてる??」

にっこり笑顔と殺気のコラボ

「わ・・・わかったじゃん」

「おい。」

「はい??」

お次は我愛羅かよ

「俺は砂の我愛羅だ。お前も中忍試験に来る楽しみにしている。」

「はいよ〜〜^m^まあ、あんまあたしの仲間に手を出さない方がいいよ。」

早死にしたくなかったらね（笑）」

（目はマジだってばよ・・・）

でまたある日

「ああん!!!!もう!!!!カカシ先生っ たら急に集まれとか言っ といて

まだ、
来てないじゃない!!」

それには理由があるんだけど・・・

言わないでおう。

「遅いつてばよ!!」

「あれから1時間たつてる・・・」

「こんなクソ暑い日に・・・殺したるか・・・」

「」おおおお・・・おはな！！おさえて（ばよー！）「」

「やあ！諸君 Good afternoon！！今日はおばあさんが・
・その前になんか言うことは？？」
「ごめんね～」

で

おはなは中忍試験に受けれるようになった!!

帰ってきたぞー！ー！！！！（後書き）

今度こそ中忍試験です！！

カフトつぜえ（前書き）

ちゃーす!!

ぢゃあいきまっせ!

カフトゥゼえ

はい！！みなさん！！

GOOD morning！！！！

いやー暑いわぁ・・・

で今日は

中忍試験の日でござえます!!

久々の忍者アカデミー！！

確か試験会場は原作通り301！

つーことはもち原作通り・・・

「おい！！お前たちみたいなのが中忍になれるわけねー！！」

・
・
・

201で試験官が幻術つかってじゃま??してるわ・・・

「なんなんだってばよお!?!」

「ちょっと!そこどいてください。」

「つち・・・」

ああ！！

きみたち！

騙されてるよお！？？

で

おかっぱでゲジ眉の・・・ロック・リー

そしてだんこのテンテン

でネジ

みんな、気づいてないようだから言っちゃおう

「ナルト、サクラ、サスケ上行くわよ。」

「「「え?」」」

「上って・・・なんで??」

「ここ2階、試験会場は3階。そしてその邪魔してる人は試験官。ってこと」

「 「 「 「 ! ! ! ! 「 「 「 「

みんな、嘘!?? みたいな目で見てくる

じゃいきなりリーがサクラに告白してフラれ、終わり。

サスケはリーと勝負するらしい。

で

勝負！！

ですけど・・・

サスケはボロでリーがあゝの禁術を使おうと思つてたところにガイ先生登場！！

つてか禁術あたしけっこうな数もってるよ？

「うわ！！先生もおつかばで眉毛ふと！！！！」

「はは！！その茶色の髪の子！！ハッキリ言つね！（キラーン！）」

「おえ！！」

なんだかんだ言っ
て結局301へ!!

大蛇丸とカブトってのはやっ
かいだけどお・・・

「おはな??どうしたってばよ?」

「別に・・・」

うーん・

大蛇丸やカブト相手になればメラゾーマとか、マヒャドとかバキム
ーチヨとかの方がいいよね!

全部禁術ですけど!!

b y 綱手

そうなんです！

9歳の時、勝手に里出て行って綱手ちゃんに医療忍術とか教えてもらったり
技見てもらったりしていたのだ！！

「ちょっと！おはな？？ドア開けるわよ？？」

「ああ！！OKOK！！開けちゃって！」

で開けますと・・・

シカマルやその他いろいろ久しい顔たくさん！

いのとサクラはサスケの取り合いでケンカ！

あとは無視

「おい！おはなテーマー無視してんじゃねーよコラァ」

「黙れ」

「なんだと?？」

無視

「ちょっと！君たち静かにしといた方がいいぞ。」

「さーせん。じゃ静かにしとくん（おやまあ、カブトさん何のよ
うで?）」

「それがいいよ。（やっぱばれたか・・・久しいね）」

「何のようだって聞いてんだよ??」

みんなびっくりあら仰天!!

「ふふ・・・そんな冷たくなくていいじゃないか？大蛇丸様が君を迎えに来たのさ。」

「そうかい、でもあたしはそんな気ないけど・・・なんだったらここで始末すんのもありだけど・・・」

「まあ、それは試験中でいいじゃないか。じゃ楽しみにしてるよ」

「うち！…さっさとくたばっちまえ！…」

「おはな・・・まさかあの話の・・・」

「どうやらそうみたいね・・・予想より早かったわ。」

「どっするんだってばよ？」

「試験でぶっ殺す！」

「っ
ておい、何の話してんだ？？」

何も知らないキバが言う

「思
いっ
きり
ガン
つけて
たじや
ない！」

いのさん・・・あんたも結構するよ？

「おい！静かにしやがれ！」

ざわ
ざわ

「またせたな・・・中忍選抜試験第一試験官の森乃 イビキだ。」

カフトうぜえ（後書き）

次回へ続くのじゃあ！！

ペーパーテストとかくそだりい（前書き）

ごそごそ

あ！！

失礼！

何してたかって？？

へへーん

実は、この中忍試験終わってしばらくしたとき原作を無視して

主人公があることをしよう！！

というネタを考えてるトコなんです！！

そのうちするんで楽しみにしてください。

はぢぢぢぢぢ (> o >)

ペーパーテストとかくそだりい

派手に出てきてジャンジャッジャーン！！

と試験官イビキが出てきたあ！！

「えーまず、前から順にこのくじを引け。」

みんな引いていく

うーんと何々・・・

19番・・・

えらく前だなあ・・・

「その番号の席につけ！」

で着きました。
と

横は、てまりとシカマル

「ふん、お前か」

「いやあどうも、てまりちゃん！」

「テマリでいい。ってかさっき何をもめていたんだ？」

「ああ・・・ちょっと昔世話になった奴でね・・・」

「ってかシカマル横ならカンニングしたるか

「おい、お前今俺のテストカンニングするとか言っ たな」

「あは？ばれたあ？」

「静かにしやがれ！今からルールを説明する。まず・・・」

ごめんちやい。

めんどいから説明飛ばす（*^^）v

知ってるでしょ???

知らんヤツは今から本を買いに行け！！
420円ぐらいケチるな！！

それかナルト アニメ検索

って押したら出てくる！！

アニメだったらタダだよ!!

はあはあ・・・

ごめんなさい

いいすぎました。

b
y
作者

説明終了

「じゃ今からテスト用紙を配る！・・・よし！後ろまでいったな。
でははじめ！！！！！」

まずう、問題を見る

超

どうしよう

あはは
・
・
・
・

・
・
・
・

簡単!!

b y 女神の力です

何じゃこれ！

すらすら解ける！

まあこう見えてあたしは、アカデミーでも

座学
5

忍術
5

授業態度
5

体術
5

というオール5だあ!!

ニヤ!!

おでりゃあああああああああああああああああああ！

解いてやるぜえ（^^）／

数
分
後

棄権の可能性を間抜け、なんとか一次試験合格じゃい!!

セ――――フ!!

「ナルト!よくやった!!」

「おはな!見直しただろ?」

「はいはい!」

SIDEイビキ

うずまき となると・・・

まさか白紙で合格する奴がいたなんてな・・・

おもしろい。

お次は・・

椿山 おはな

わずか10分でこの問題を解くとはな・・・

まだみんなが一次試験の意味を分かってない時、1人だけ鉛筆が進んでいた。

しかも、全部あっている・・・

SIDE
アウト

次の日・・・

「私が二次試験官のみたらし アンコよ！今回の試験は第43練習
場・・・
別名 死の森でやってもらっわ！」

「わー！おもしろそうー！」

といったのはあたしだけだった・・・

」あら、その女の子・・・そう思っただけじゃ・・・」

けど・・・

ここで大蛇丸が来るのよね・・・

って見つけた!!

ナルトにクナイを投げつけた!!

はっ--!!

「何してんの??変態ちゃん。」

「ふふ・・・ばれちゃった?」

きもお!!

(正体はまだ明かさないでね?いろいろと面倒だから)

「はいはい。つか失せろ。」

「ごめんなさいね。」

「なんだってよ・・・」

「えっと気を取り直して、名前を呼ばれた者あの小屋に来なさい。」

ここも原作通り、天と地の巻物を二つ持って5日以内に塔？にくること。

ちなみにあたしたちは、天。

巻物はあたしが持つことになった。

「言われた場所に行って！そして試験は一斉に始める！！あと二つ

アドバイス……
死なないでね。」

みんなの顔から血が引いていつてる。

そんなビビんなくても……

（ふふ・・・おはなったらずいぶん強くなっ
たわね？あとは木の葉
崩しを行って私の器にさせ
私色に染めてあげる？）

いま寒気が・・・

え・・・何？？

ソワ！

ペーパーテストとかくそだりい（後書き）

次回・・・戦闘が・・・／（。□／）（／□。／）／

二次試験スタート・・・ある意味別の試験かも（笑）（前書き）

うははは！！

今回は、創立記念日で学校が休みなのだあ？

二次試験スタート・・・ある意味別の試験かも（笑）

「スタート！」

アンコさんの声でいっせいに扉が開きスタートした。
おそらく、大蛇丸はサスケとあたしを狙ってくる。

なら、まずサスケを守らなきゃ！

と、言ったものの・・・

「おはな、まずどうする？」

サスケさん・・・

あたすに聞かないでくださいよ・・・

「そうね・・・とりあえず寝たりする場所を探しましょ。」

「えー！！？なんでだつてだよ？？」

「いきなり巻物を奪うのは早いわ。なにがあるか分かんないからみんな離れたらだめ。」

「1人で行動は絶対しちゃダメ！！特にナルト！！分かった？？」

「なんで俺だけ・・・」

「「あんたがまっすぐぶつかって面倒な事になりたくねーからだよ！！」（しゃーんなるー！！）」

「サクラとかぶった。」

「ま・・・まあ、とにかく絶対しないでよ！！でどんな所にするの？」

「うーん・・・洞窟っぽいトコがいいわね・・・」

「でも周りが見えなくないか？」

「サスケ、その事なら大丈夫！！敵に見えない程度に穴をあけるわ。」

「了解だつてばよ！」

で探す

「なかなかないわね・・」

「まあ、しょうがないわよ。サクラ焦る事はないわ。」

ガキーン！

その瞬間前方からスゴイスピードでクナイを投げてきた奴がいた。
残念ながらあたしが、クナイで跳ね返したけど？

「大蛇丸・・・なんのマネだ？」

「あらまあ・・・避けられちゃった・・・今の本気で投げたのにねえ・・・」

「つち！
もう来たか。」

「あなたの目的は何？あたしを連れ戻すだけじゃないでしょ！それだけなら人の顔取らずにいきなり来るはず」

「以外に鋭いわね・・・正解？それだけじゃないわ。」

「言っ気がないなら強制的に吐いてもらっわ。」

そっついあたしは、クナイを左手で用意した。

「ふふ……どうかしら……」

同じく向こうも構える。

「土遁！土石竜」

印は片手の指だけ動かし見えないようにした。

「ぐはあ!!」

大蛇丸・・・

どうやら影分身ではなくもろにくらったわね・・・

「今の印・・・見えなかったってばよ・・・」

「それなのに、術が発動した・・・いったいどんな修行をしたの！？」

「まさか・・・私を超えてるなんてねえ・・・急所狙ってたし危なかったわ。」

「うち！さっさとくたばりやがれ！..」

その頃のアンコ

「さーてと・・・」

ふふ・・・

さつき、悲鳴が聞こえたわ

聞いたことあるような声だったけど・・・気のせいよね

もう始まったわね

これから、どうしましょ・・・

あんまゆっくりできないわね・・・

5時間ぐらいしたら、早い組はもう到着しちゃっつー!!

団子でも食べようかしら

「アンコ様、大変です!!」

「何? どうかしたの??」

「死体が見つかりました。」

「その場所へ案内して!!」

んもう!

死ぬってアドバイスしたはずよ？

いろいろ、めんどいことになっちゃうじゃない・・・

さよなら、5時間・・・

「……です。」

！！

これは・・・

顔がない死体？
まさか！！

「身のものを確認したところ草隠れの忍びと思われます。」

この顔・・・

さっき、茶色の髪の子に向かってクナイを投げた奴の顔？？

奴が来たの！？

「えらいことになったわ！あんなたちすぐ火影様に知らせて！説明してる暇はないの！！」

「は！！」

つくそ・・・

早く探さなきゃ！！

S
I
D
E
サ
ク
ラ

数
分
後
の
お
は
な
た
ち

なにこれ・・・

あの大蛇丸って奴結構強いのに、おはなはまだ一つも傷を受けず戦ってる・・・

それに大蛇丸・・・もうチャクラがほとんどない！！

攻撃してもすべてかわされたり、ガードしたりしてる・・・

おはなは、あんなだけの術を発動したりすばやい動きをしてるのに息

の　一つも乱れてない！

正直動きについていくのにせいっぱい！！

見えなくなる時も何回あったらう。

おはなってこんなに強かったの？？

しかも、目つきが怖い

殺気も今はもうないけど、会った時死にそうぐらい出してた。

SIDE
アウト

「やばいわね・・・ここまでされちゃあ・・・じゃあね」

そっつい消えた

「っち！逃げやがって!!」

二次試験スタート・・・ある意味別の試験かも（笑）（後書き）

戦闘シーンあんまり書いて無くてごめんなさい！

キャラかわっちゃった(笑)

あんの！クソ変態が！！！！

逃げやがって！

絶対次あったら、ぶっ殺す！！！！

「おはなスゲーってばよ!!」

「ありがとう」

あんにゃろー・・・
言いたい事言いたい放題しやがって・・・

で周り見る

森半壊

気づいたらアソコさんや上忍がいる

ナルト地味にびびってる

サクラ震えてる

サスケびっくらポン！

みたいな感じ

「・・・ちょっとやりすぎちゃったかな？」

「「「ちょっとじゃねーだろが！」「」「」

あっは！

みんなにつっこまれた

この森・・・もろくね？

ためしに地面蹴る

バコーン！！

地割れの完成

「何してんだYO？」

あれ？

カカシさん？

「よ」の発音違うよーな・・・

「おはな・・・あんだどんなバカぢからよ・・・」

いのさん？

あんたに言われたくない

ほとんどの上忍はこう思った

「「「（あの力・・・綱手様に似ている）」」」

「あの・・・地面の強度図ろう思ったらこうなりまして・・・」

「図るのにここまでする事ないでしょ？」

あはは・・・

カカシさん・・・

顔笑ってるけど殺気だしてんじゃん・・・

「だってさあ！大蛇丸ここで殺そつとさあ思ったらアイツ逃げやが
つてさあ！！」

幼稚な言い訳

このあと

おはなが上忍、火影に呼び出されるのは無理もなかった。

キャラかわっちゃった（笑）（後書き）

次回、中忍試験のとき原作ぶち壊しです（笑）

けっこう呼び出して怖いww(前書き)

お久です！

ふふ・・・

ネタができたのだあ！

いきなり疾風伝にいつちやうからねえ！！

中忍試験終わったら覚悟しなあ(笑)

けっけっ呼び出して怖いww

という事で試験は二次試験合格したが・・・

予選する前に呼び出されたおはなである

火影様の部屋だす

「おはな？お前はどついう事だ？なぜ大蛇丸を知っている？」

「・・・木の葉の里に来る前にちよつといろいろありまして・・・」

「というか、お前は来るじゃなくて落ちてきただな。」

上から火影ちゃん、おはな、カカシ先生

ちなみにこの会談？にはカカシ、ガイ、アスマ、紅、アンコ、ハヤテ、イビキ、火影ちゃんがいる
ちなみにナルト、サスケ、サクラも

黙ってるけど

もうほとんど、取り調べやないか！！

作者は大阪人です

ああー怖い怖い

誰がしゃべってんのか分かりずらいと思うので
名前今だけ入れますね！

紅「それにあなた、土遁、水遁、雷遁を使ってたわね。」

ハヤテ「ごほ・・・もう上忍レベルじゃないですか・・・ゲツホ！」

アスマ「確かおはなは継血限界で氷遁も使えるな。」

火影「資料にはお前は水の性質だと書いてある。」

なんか・・・やばい状況??

アンコ「その他の性質を使えるだなんて・・・あなた一体何者？」

めんどくさー・・・

やるんじゃないかった・・・

女神いなんとかしてよ・・・

「えー？やだ」

くそ・・・使えないわい

「もう！しょうがないわねえ・・・」

幻覚

見せてる

で

転生の事以外の過去

これでどうや！

けっけっ呼び出して怖いww(後書き)

次回へ(＊＾＾)v

これでどーやー！（前書き）

毎回短くてすんません（＜―＞）

ってか登録の人多くなつたなあ泣

「これでジーやー！」

ちなみに女神によって出されたおはなの過去の幻覚はナルト、サクラ、サスケも見ていた

火影「おはなの大蛇丸のことについては分かった。だがなぜ雷遁なども使える？」

カカシ「あの術の完成度から見るとお前は風遁も土遁・・・すべて使えるはずだ。」

ギクギク!!

おいおい・・・

かなりやばくね??

この状況・・・

アスマ「一体どんな修行をしてきた？」

「・・・えつと・・・実をいうとアカデミーの授業は影分身にさせて本体のあたしは

綱手様や自来也さんに修行させていただいてましてね・・・」

頼むからもうこれ以上の追及はやめてケロー！

カカシ「本当だな？」

本当！これ本当だもん！！

「はい！！そうです。」

腕も治してもらったし！
綱手ちゃんに！

ポン！！

・
・
・
・

自来也登場！！

つて

[illegible]

出番早くね???

まあ、何があるともこの状況で自来也さんが来るのはナイスだ！

「自来也、話聞いてたが……まあ本当じゃ！」

やっほおおおおおおおおおおおおおお
おおおお！！

あんた神！

今日から自来也あたしの神じゃあああああああああああ
あ！

（うは・・・おはなむっちゃ目きらきらしてるってば・・・）

（ピンチだったのね・・・）

（みえみえだつーの！まあそこがかわいいんだけど・・・／＼）

（・・・なんか理由がありそうだけどまあ、そのうちまた聞き出す
事にしよう・・・）

b y カカシ班

みんなは顔を見合わせうなずいた

火影「なら今日はここで解散じゃ！自来也は残れ」

パ
タ
ン

いっやほおおおおおおおおおおおおおお
!!

なんて翼が軽いのかしら

翼なんてないけど

あの空気から逃げれてピース!!

いやあ、あついう場面も考え言い訳？を考えらないといけないわね。
・

火影
の部屋

解散といったものの上忍、自来也、火影はまだ部屋にいた

自来也「ったくおはなはよお・・・嘘ならもつとばれないようにしろっての」

カカシ「明らかに助けてって目でしたね・・・」

自来也「正直にいう。確かにわしが修行をつけたが風遁しか教えておらん！」

カカシ「やっぱりそうですか・・・」

火影「おはなはまだ何か隠しておる。しかし・・・なぜクシナに似ておる？知恵はミナト・・・」
笑った顔もミナトに似ておる」

ガイ「私も中忍試験で見ただけですが、気づきました。チャクラの感じも似ています。」

カカシ「俺もそれは気づきました。」

紅「でも、おはなは白と姉妹だし・・・もともと水の国付近で生まれたと・・・」

アスマ「何か隠していますね。」

アソコ」これから行動もよく見ておかないと・・・」

女神

「ふふ・・・おはなちゃん・・・嘘ついちゃってごめんね・・・
いや・・・セツナなんだけど・・・本名は。
いろいろ楽しみはあとにとった方がいいでしょ？？
そのうち話すけどねえ」

いれでぶーやー!! (後書き)

おはな・・・いやセツナの本当の過去とは・・・???

おはなの秘密（前書き）

今回は女神視線で書きます

おはなの秘密

ふふ・・・

実はおはなちゃんをかわいくて、かわいそうだから転生さしたという事でわない

女神だってちゃんと理由ぐらい持つてるんだけど、それをおはなちゃんに言っていないだけ

ミナト、クシナという人物から依頼があったのよ？

1人波風ナルトに双子の姉波風セツナがいてその人物が命死にかけたの。

だからそちらの世界で誰か命が欲しいと・・・

こんなの間違ってるに決まってるけれど・・・

だからこつちの世界で満足に生きていけなかった人物を器にそれがおはなちゃん！

2人は大喜び！！

その人物に感謝し寿命をセツナちゃんにもらった。

でも九尾事件が12年前おこった。

おおざっぱに説明するとミナト、クシナの2人が命をかけてナルトに九尾を封印した

そして死後わたし女神の元に現れ、木の葉に九尾の関係の者が2人いると
なれば危ない

だから私の力で白を双子の姉妹として物語を作った

白をあやつって

大蛇丸たちが来たのは予想外だった。

そして名前もばれないようかえた
ナルトもつずまきになり一応まぬがれた。

でもなぜか九尾事件がもう一度おこった。

暁のトビが操ったと考えてよいだろう

そして今

クシナ、ミナトが私のところに来た

「何度もすいません。ただ3代目やカカシ・・・里のみんなに会い、セツナ、ナルトの事をみんなに伝えたいんです」

「どうかお願いしますってばね！」

「いいこと思いついちゃった」

「「なんですか？（ってばね）」」

「それは・・・というわけできっかけは私が作るがタイミングを誤ったらだめよ！
セツナことおはなは私がいろいろ少しずつ吹き込んでいくから」

「そこまでさせていただけるんですか？」

「ええ。いくら神の私でも人の命を復活させる事はできないけど・
・これならいいでしょ。」

「十分つてばね！ああ早く会いたい！」

「それじゃ、そのときまでここにいとわ。」

おはなの秘密（後書き）

以上です！

秘密などはもう少しで書くんで楽しみに？

登場

帰るとき顔岩を見た

「にやにや」

「ちょっと…ナルト何にやにやしてんのよ」

「おはなつてば思いっきり困つてるとこ見れたつてばよ!」

ガシ!

抱き着く

「それが狙いなの?」

「ふふーん!」

げし!

「いって!サスケ何するつてばよ!?」

「ふん!」

「あらまあ。」

でなんとなく四代目の顔岩見る

すう

「クシナよく頑張った。ありがとう」

「ふふ・・・そっいえば名前は？」

「2人とも自来也さんから弟がナルト、姉がセツナ」

「いい名前ね・・・波風ナルトに波風セツナ」

すう

何？

今の・・・

四代目顔岩そっくりの人ときれいな女の人・・・

「おはな？どうしたってばよ？」

それにナルトって

もしかしてナルトのおや？

セツナって・・・誰？？

なんであたしだけに見えて・・・

女神
SIDE

ナルトと双子だとばれないよう変化の術をかけた。
ただふいんきと、表情などはかえらないでおいた。

それに白と似せておいた

しかも今は白だけ事情を入れておいた。

あとは白が動いてくれるだけ？

SIDE
アウト

「おはなどうしたの?」
「」

セツナって誰なの?

「おい！どこ行くんのだ？！！」

ボタン！

「な・・・なんじゃ・・・おはな」

まだみんないる？

「火影様！セツナって誰なの？」

「おぬしどこでそれを・・・」

「姉さん・・・まさか記憶が?」

「白!?!?どういつ事なの??!?なんか知ってる?」

「白! 記憶とはなんだ?」

「何があつたつてばよ?」

「ええ? どういつ事?」

「紅？どこへいった？ってキバ？」

「・・・ずっと黙ってたけどナルトとおはなのにおい・・・なんか似ているんだ・・・」

「」「ええ？？」

「って気づいたらもうガイ班、アスマ班、紅班、カカシ班のメンバー全員いた。」

「ついでにシカクさんやもうその辺の人まで」

「白知っていることすべてはなせ!」

カカシ先生まで・・・

意味が分からない

女神・・・どういっつもりなの!?

ポン!!

「・・・そんなまさか・・・なぜミナトとクシナが・・・」

「!..」

「白みん もっしょ」

家族（前書き）

えー・・・

なんかすごい重いタイトルだけど内容・・・普通かな???

家族

「ミナトにクシナ！？？なぜおぬしらが・・・それになぜ白を知っておる？？」

「すいません・・・もうばれちゃいました・・・」

「白！？どうしたの？？あったことあるの？」

あたしあったことないけど・・・
けど・・・

何か懐かしい感じが・・・

サクラ「ねえ・・・あの金髪のお兄さん教科書に載ってなかった？」

いの「確かに……」

キバ「におい……おはな、ナルト、金髪の兄ちゃん、赤の姉ちゃん全員においが同じだ……」

赤丸「ワン!!」

はい？

んなアホな

「まーさか!! キバあんたニンニク食べた??」

「食ってねえわ!!」

「ワン!!」

「あんたさっきからワン!しか言ってないじゃない!!」

「せ・・・先生？？」

「カカシ・・・久しぶりだな」

「なーると！！せーつなあ！会いたかったってばねえ！！！！」

ぎゅー！

「ぐえ！」

「ぎゃあー！！」

だれえ？この人？？

ってか力強すぎ・・・

「ぎ・・・ギブギブ!!」

「同じく・・・だってばよ・・・」

「あー!ごめんってばね!!」

ぱ!

と離してくれた

ああー死ぬかと思った

三途の河見えちゃったじゃん・・・

「んーと・・・セツナの事は僕が話すよ!」

といいあたしの方に視線を送る

「??あの・・・あたしおはなですけど・・・」

「細かいことはきにしないってばね!」

「いやいや気にしますよ?」

「解!!」

金髪の人はそいい印を組んだ

「ん？」

なんか・・・あたしの周り・・・白い煙いっばいなんだけど・・・

ポン!!

「きゃあああああああああああ!????????????????
?????」

目の前が白い煙でいっぱいなんだけど・・・

煙が晴れた

「おゲッホ!!ゲッホ!!って何するんですか??」

周りを見るとサスケは顔赤くなってるし、サクラはえ?と言ってる

カカシ先生はマジ???みたいな顔だし・・・

ナルトはあたしの顔をガンミしている

なんじゃ??

こりゃ・・・

「君はおはなじゃなくてセツナという名前。ナルト、セツナ君たちは双子の姉弟として生まれた僕たちの子供だ。」

「はいあああああああ!?????」

「なあにiiiiiiiiiiiiiiii!??」

名前は・・・椿山おはなじゃなくて・・・うずまきセツナ・・・

2020

家族（後書き）

次回へ続く

真実（前書き）

にやわー!!

今回の話意味わかんない・・・かも（<|>）

真実

「あれ？でもあたしが2人の子供だしたらなんで姿変わったの？」

まあ、隠してた理由は分かるけど・・・

「まあ・・・名前だけ違っていて姿がクシナそっくりになったらさすがに上も黙ってないだろう？」

「なるほど・・・怪しまれないためですね。」

カカシナイス！！

ナルトはポカーンとしてた

まあね・・・うん

「まあ、もっと詳しく言いたいけど・・・ナルトが分かってないから大きくなったらまた、出てくるよ」

「」「」「あ!!!!」「」

今度会うのは・・・戦争ぐらい？

また考えておきます
by 作者

「じゃあね。2人とも」

そついい父さんはあたしと、ナルトの頭を撫でた

「また会いにくるってばね！」

「ぐえー!!」

抱き着くの・・・力いれすぎ・・・

「」「じゃあ」

ポン!!

消えた

いま思っただけど・・・ナルトの抱き着くせって母さん似？
でもそれって家族だけだし・・・

あたし、そんなに気にしてないしっか！
いやしろよ！！

「えっと・・・まあいろいろ事情は分かった。」

「そういう事で今日は解散ということで・・・」

「そうじゃ！！中忍試験のこと考えておかないと・・・ぶつぶつ」

「「「失礼します」「」

あれ？

いま思ったけど・・・

白とあたしって？？？？

『それについては、女神が説明しまあす！！』

「出た……あんた何してくれてんの！？意味わかんない！！」

『まあ、はつきり言つてセツナちゃんはある人たちの子供！だからあたしの力であなを
白ちゃんの所まで落として育つた……ってこと！つまり養子だつたってことになるかな？』

「じゃ・・じゃあ白とあたしは・・・」

『うん。無関係！！まああのことは自分でガンバ！それじゃ プッ
ッッ』

ム力

「あんにゃろー!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

その辺にあった電信柱に向かってグーパンチ！

力抜いて電信柱に大きなひびが入っていた

周りのみんなあらびつくり！

拍子抜け？っていうのかな？？

「あとのことは自分で？ってマジうぜえ！！会ったらぜってえぶっ殺す」

やってくれたねえ・・・

m e ・ g a ・ m i

「おい・・・セツナ？どうした？」

は！！

カカシがおいおいみたいな目で見てくる

「別に！」

悪いな今のあたしはキゲンが悪い

「うーん・・・」

ナルトが何やら悩んでいる

「どうした？ナルト」

「いや・・・俺ってばセツナってよんだらいいのか、姉ちゃんって
いえばいいのか？？」

「あたしは別にどっちでもいいわよ。」

「じゃあ！セツナで！」

そっくり抱き着いてくる

これお約束になっちた（笑）

「りょーかい！」

そっくりあたしも抱き返すのだった

真実（後書き）

p
s

後日ナルトはサスケににらまれるようになったとかないとか・・・

「ってかあたしと白の関係どーしたらええの!???」

「それはまた考えておきましょう!あ!どうも作者です。」

「どうでもいいわい!」

「いつも見てくださりありがとう(´<|>`)(」

「無視?」

「できれば感想なんかほしい ゲボオ!」

「無視すんじゃないじゃまた見てネ」

くじ引き（前書き）

あい！

もう、原作スルーして自分風の中忍試験にします！
ちゃんと木の葉崩しは実行しますが（＾o＾）

くじ引き

後日

ああ~~~~、んもう!!

あたしと白はどんな関係にしたらあ！

あれから、別に何事もなかったように白と接してる

でも・・・”なにごと”もなかったっていうのは・・・

でも白はいつから、あのこと知ってたんだろー・・・

知っていたのに・・・何事もなかったように接してくれて・・・
白って本当にやさしいなあ！！

こんなことをいつも考えているうちに寝られなくなっていました

ああ！

ダメだ！

こんなに寝られない日続いたら仕事にも差し支えるっーの

やめだ！やめだ！考えるのやめよ！

次の日

「おはよう・・・」

「「「！・・・」」」

「せ・・・セツナ目のくま・・・どうしたの？？」

「大丈夫ってばよ？」

「それで仕事行けるのか？」

「（まあしょうがないわな）よし！全員そろったな！今日の仕事は牧場主の手伝いだ！行くぞ」

「ってただ寝てなかっただけじゃねーよ！」

「ちやーんと寝不足ナオール作ってたのだ！飲んだ瞬間寝るとかいうオチはないよ！」

「もう飲んだし」

「ってかくま、もうないし！」

サクラ ナーイスつつこみ！

「あははは！…まあこんぐらいの病気？なんて薬で作れるし、医療忍術でなんとかなるよ。」

んで笑う

「意味わかんねーってばよ！…」

「ふん」

「しゃべってないで歩く！」

「「「はい！…」「」」

しばらくして中忍試験の二次試験合格者はアカデミーに来るように
言われ
集まった

「えーみんな集まったようじゃな。まず木の葉16名 砂3名 音3名・・・」

木の葉はカカシ班、アスマ班、紅班、ガイ班 そしてカブトの班
砂は我愛羅のそこ 音はまああれ
名前は忘れたけど、分かると思う

「ここで第三試験の出場者を決めるためくじ引きで当たりを引いた者だけが出場できる」

「なるほど・・・運ってことですか。」

「セツナ、正解じゃ！運も実力のうちじゃからな！！」

「（セツナ？おはなではなかったのか？？何が起こったんだ）」

「（テマリ、あとで聞きに行こうじゃん）」

「じゃあ私が回るから一枚だけ引いてね？どれか当たりなんて見ようとしたってムダよ
結界術があるから？あと開けてっていうまで開けちゃだめよ」

アソコさん・・・大蛇丸化してますよ？
ってかあの術あたしがかけたやつ！！

あのタメに呼び出されて術をかけさせられたの？

．．．
そっか、確か母さんの得意な術でその血があたしにも流れてるのね．

「うむ、みんな引いたようじゃのう。では開けてよいぞ」

どれ？

当たり

「うっじゃーいー!!」

「セツナも当たったのか？」

「ナルトも？」

「ああ！」

「「イエーイ!!」」

2人とも満面の笑顔で抱き着いてる

「サスケは？？」

「ん」

当たり

「おー！！」

「サクラちゃんは？」

ドン

暗い

ってことは……はずれなのね……

「ナルト……しばらくそっとしときなさい。」

「では当たった人、紙を持って前に出てください。」

そろそろ

「名前を言ってくれ」

「うずまきナルトだってばよ」

「うずまきセツナです」

「うちはサスケ」

「薬師カブト」

「奈良シカマル」

「ロック・リーです！」

「日向ネジ」

「我愛羅」

「テマリだ」

音全滅ってか

まあ木の葉ほとんど当たったしね

「うむ、以上が第三試験出場者じゃ！前に貼ってある紙を見よ」

うずまきナルトVS日向ネジ

テマリVS奈良シカマル

うずまきセツナVS薬師カブト

我愛羅VSうちはサスケ

ロック・リーは我愛羅とうちはサスケの勝負で勝った者が相手となる

っしゅ！きたあ！！

「まさか君とはね・・・」

「は！カブトてめえを生きたまま三途の河渡らしてやる」

くじ引き(後書き)

まさかの宿命対決？です

(^ o ^)

自来也って本当にヒロイよね（前書き）

タイトルはまあ・・・思いつきですねん

気にせんといってください

自来也って本当にヒロイよね

まさか、相手がカブトとは・・

ふふふ・・・

この一ヶ月死ぬ気で特訓するぜ!!

ナルトは原作だと自来也に会っはず!!

あっしもまた修行つけてもーらお！

「
おい
」

「
ん？？？
」

テマリだ!!

「テマリ!おひさあ!」

「お前なんで姿とか名前とか変わってんだ?」

「ってかナルトと同じ苗字じゃん。」

「うん姉弟」

「なに!?」

「知らなかった!??ごめんごめん!!」

「知るわけねえじゃん！！」

「どっどっ。」

「俺は馬じゃねえ！！！」

「カンクロウ落ち着け。そういうことか。じゃまたな」

「ばーいばーい――！！！」

「姉ちゃん帰るってばよ」

「あれ！？？ナルト、セツナじゃなくなったねえ」

「みんなに普通は名前で呼ばねえだろ！って言われた・・・」

「まあ、そうだろうね。じゃ帰ろうナルト！..」

あ！

途中まで帰ろうって意味ね！！

「姉ちゃんは修行すんのか？」

「うん！自来也さんにつけてもらおうと思って！..」

「自来也？？」

「あんたもつけてもらおう？」

「おうってばよ..」

「うーし..！会いに行くよ」

自来也
SIDE

んふんふ？

おお！あの子はケツ、プツリプツリじゃのう？

いやめずらしく今日は大当たりじゃわい！！

いい小説のネタになった

セツナも将来絶対、美人で、ばいんばいんのプツリプツリになるの
う。

「将来が楽しみじゃわい!!」

「「って何してるってばねえ!」(ってばよお!...!)」

「ぶいお」

だ・・・ダブルキックとは痛い・・・

特にセツナ・・・お前本当にミナトの血が流れてるのう

かしこいのもな・・・

特に笑顔が・・・

「お？その隣は誰じゃ！？？」

顔はミナトに少し似ているの・・・

まあミナトと違ってバカの顔あるが・・・

「ああ、弟のナルトと一緒に修行つけてもらおうと思って!!」

なるほど・・・

こいつは将来男前になるのう。

「別にいいが・・・」

「「よしじゃあ!」」

場所かえて第20練習場

SIDE
アウト

「はい！というわけで修行つけてくわってほめてほめて……」

「ああ……はいはい」

自来也って本当にエロいよね（後書き）

作者「どうもです！ーえーここで皆さんにお知らせです！ー！

質問とかある人！ーバンバンください。セツナとわたくし作者でお答えします」

セツナ「ということです！できるだけネタばれ発言は引きかえてください。」

「「おたより待ってマース！」」

いきなりその技きたー（・o・）！！（前書き）

はい！報告です！！

中忍試験終わったらセツナがあんなこととして疾風伝いっちゃんいます

（*^^^）v

ぐ・・・

別に書くのめんどろとかそんなんじゃ・・・（噓つけ！）

いきなりその技きたー（・o・）！！

「では修行メニューを今からいう！！」

「おっしゃー！！ーい！！」

「なんでもこいつてばよ！！」

「まず質問だが・・・二人とも水面歩行と木登りはできるかのう？」

「「んなのできるに決まってるってばね！（ってばよー）」」

ナルトは原作より強いです

「ナルトもか！？？」

「で・き・る・！姉ちゃんと一緒にそれで遊んだりしたってばよ！
！（木登りは最近だけど）」

自来也さん・・・あんなマジ！？みたいな顔になってるよ・・・

ナルトを見くびりすぎ・・・

「そうか・・・ならばこの修行じゃ!!」

そついい手のひらに空気を集めだし丸い球になった。

「螺旋丸!!」

ドコーン!!

その辺にあった木がボロボロになっている

「す．．．すげー!!」

「木の割れ方が．．．そのまま丸く円状に割れて．．．」

「セツナ! いいところに目をつけたのう!!--ミナトに似ておる。」

「父ちゃん知ってるのか!??」

「ああ！わしの弟子だった。ちなみに螺旋丸はミナトの術でわしも会得したんじゃない」

「「嘘！！」」

「あれ？セツナも知らなかったのか？」

「「うん」」

「ドーン！！」

なんか落ち込んで・・・

「と・・・とにかく！螺旋丸をやってみろ！！（まあ、一番最初は無理じゃろっ）」

「よし！」

確か手のひらにチャクラを集中して・・・

「あれ？？セツナお前左利きか？？」

「うん。綱手様に治してもらったけど、無理はするなって・・・」

んで集中!!

お!!

自来也さんの青じゃないけど、薄緑のんできた!!

「あ!!姉ちゃんできたんじゃない?」

「ま・まさか一回見ただけで、できるとはのう。」

「次は俺だつてばよ!!」

ナルトは何十回か失敗してたけど50回目くらいでできた。

「うっし！できたあってばよ！！」

ナルトのんは青

「よし！それを木に当ててみる」

「螺旋丸！！」

バキ！！

ちゃんとして自来也さんみたいに普通に丸く穴が開いた

「やったあ！エロ仙人みたいにできたつてばよ！」

「あたしも!!！」

「「イエーイ!!！」」

抱き着く2人（笑）

「エロ仙人って……がく……」

「そうだ！」

「どうしたってだよ？」

「螺旋丸作って2人でチャクラ融合？的なこと言って2人で大きい螺旋丸作らない？」

「いい！！それいいってだよ！！！」

あたしは左利き、ナルトは右利き

ちょうどいいじゃん！！

「行くよナルト！！」

「おう！！」

ぎゅるるる

2人とも螺旋丸を作る

そして

「「チャクラ融合!!」」

ぎゅっるるるる!!!!!!

そして合体した螺旋丸

色は薄緑と水色？があわさってキレイ・・・

「このままどうするってばよっ」

「一緒に打ちにいくのもいいけど・・・ちょっと考えがあるの！ナルト手離して！..」

「おう..」

「（セツナは何をするつもりなんじゃのう？）」

よし..!!

すごい高密度なチャクラ・・・これをコントロールして投げる

1人で打つには女のあたしには無理

そして投げた後チャクラコントロールで動かす

水遁とか火遁、すべてのチャクラ変質できてそれも技をしてチャクラコントロールで操った！

これもやればできると思う

「ダイナミックじゃーい！ー！」

そして投げる

投げれた！！

このまま操る！！

さすがに少ししんどいけど

「やって見せる！」

右！

右に動く

左！

左に動く

とまれ！

止まった

「で・・・できたってばね！！」

「なんじゃつと・・・」

「姉ちゃんすげえ！！」

このまま投げてその辺当てたらこれはそうとうな破壊力になる・・・

そのまま螺旋丸を当てず、解いた

映画「ザ・ロストタワー」で自来也がミナトに螺旋丸を見せて螺旋丸をすうってなくした感じの奴！

「この術なんて名前にするってばよ！？？」

「うーん・・・融合螺旋丸とか？」

「いい！それいい！！」

「よし！決定ね！！」

「（まさか初日で、できてオリジナルの技作ってしかも高密度なチヤクラをコントロールしよった
投げるなんて・・・こいつは2人とも将来が楽しみじゃのう）」

「うわ！なーにエロ仙人にやついてんだってばよ・・・」

「もしかして・・・まーたエッチなこと考えてんじゃ・・・」

「違うわい！！」

「それより、もう夜ね・・・」

「今日は一樂に決まりだつてばよ！」

「よし！おじつてやるぞ。」

「やった！！食費が浮いた！！」

「ラーメン？ラーメン！！」

「食費が浮いたって・・・のう・・・」

いきなりその技きたー（・o・）！！（後書き）

あとがき

一応言っとくけど・・・セツナはもう口寄せできます。

何を呼び出すかは・・・

また話にでてくるので、楽しみに？

それではまた次回！

プリンはカaramelがなかったらうまくない(前書き)

今回は一楽から始めます(^o^)

タイトル思いつかないときこんな感じのタイトルにするんで)*^
^) v

プリンはカaramelがなかったらつまくない

「いつらっしやい！」

幕を開けるといつもの親父さんが立ってその横にあやめさんがいた

「なんだまたお前たちか。」

「今日は何する？」

「味噌チャーシュー大盛り！！」

「とんこつチャーシュー大盛り！！」

「醤油チャーシュー大盛り!!」

上からナルト、セツナ、自来也

「全員大盛りなのね」

そっぴいあやめさんが笑った

もち自来也さんがあやめさん口説こうとしたが……

「何しとんじゃい!」「」

って2人でハリセンでぶっ叩いた

「それにしても2人とも・・・えらくかしこいのう。」

「そうだろ！！俺ってば実はドベ、頑張って演じてたんだぜ？？」

「それまたなんで？」

「小さい頃から姉ちゃんに修行つけてもらってたんだ！！けど姉ちゃんがいきなりその力を
発揮したら暗部の人にK O ・ R O ・ S A ・ R E ・ R Uでしょ！？って言われてたからよぉ・・・」

「まあそうじゃのう。ハッキリ一回見ただけあそこまで行くとわしの立場ゼロじゃ！！」

「そうね。で・・・明日はどんな修行を??」

「口寄せを教えてやろうと思ってな。」

「ラーメンお待ち」

「あ!どうも」

「味噌ちゃーしゅ」

「久しぶりだのう。」

んで修行中

やり方とかは原作通りで
ご想像におまかせします

日は暮れ夕方

「うし！ナルト、セツナ最後にありったけのチャクラ使って口寄せしてみんかい！！」

「りょーかいだってばね！（だってばよ！）」

「口寄せの術！！」

ボン！！

ナルトは親ビン

セツナはキレイな色をした真っ白な兔を口寄せした

「なんじゃい！この小僧がわしを口寄せしたんか！？」

「正解だつてばよー！」

今のナルトは汗だくで紙が少し乱れていて髪型がミナトに近かった

「な！―！こやつは・・・」

「そう、ミナトの息子だのつ。ちなみにその横にいる女もミナトの娘」

「なるほどな。」

「うへー！！すごい大きくてきれいな兎だあ・・・」

「あなたがわたしを口寄せした者ですね？わたしはいずみと申します」

「あたしはセツナです！ヨロシクね」

ポン！！

「大きかったらチャクラの消耗が激しいので小さくさせて頂きました。」

ちなみに今のサイズは普通の兎と同じ大きさだ

「その姿でこれから出てきてちょうだい」

「分かりました」

で契約に印を押して終了した。

そして数日後

いよいよ中忍試験第三次がある日になった。

第一予選？はナルトVSネジ

まあ・・・これまたネジはナルトを少しなめていたようで
螺旋丸をうまくくらって瞬殺。

まあナルトもそれなりのスピードを出していたから、写輪眼でも難
しかったと思う

「やったつてばよ！」

「おめでとーナルト！修行の成果でたね」

「ナルト君おめでとう。」

「ヒナタありがとう」

「う・・・うん」

ヒナタさん、顔赤いよお??

つま見てた人やカカシ先生などの上忍も驚いてた

原作と違いサスケとカカシ先生はすぐ来た

んで地味に自来也さんいた

「あ！エロ仙人！！」

「でっかい声でいうな！！」

「自来也さん・・・もしかして螺旋丸を・・・」

「よお！カカシ久しぶりだのう。」

「まあな。螺旋丸はセツナとナルトに教えただが・・・あのスピードのはビックリしたわい。」

「まるで黄色の閃光・・・」

「多分セツナが修行を付けたと思うのう。セツナは本当にびっくりした。一回みただけで

螺旋丸完成して、ナルトとオリジナルの技作ってチャクラコントロールで螺旋丸を操ってた。

わしもできんし、多分ミナトでも難しいと思う」

聞いてたいの、サクラやそのほかの同期のメンバーが驚いている。

「うつそ！ナルトがあ！？」

「そんな・・・」

「まさかネジに一瞬で勝つとは・・・ナルト君素晴らしいです！」

「そうだ！わたしも感動したぞ！！リー！！」

そういつて2人で腹筋しだした

・・・バカだろ？

「ナルト・・・お前なんかアホ面抜けたな・・・」

「ん？そつか？？ありがとなシカマル。」

そういつてやさしく笑うのはセツナとミナトそっくりだった。

b y 自来也

「カカシ先生」

「ん？なんだセツナ？？」

「サスケに雷切り教えてたの？」

「！！なんで・・・」

「あ、やっぱ？？」

で・・・視線を風影と火影に移す

風影・・・大蛇丸のチャクラの感じがする

「自来也さん？」

聞いてみたが・・・

「ん？なんなのう？」

「いや・・・気づいてないならいいです。」

「何をだ？」

うーん・・・言ったら絶対戦うよね？

「次の試合！予定を変更してシカマルVSテマリです！選手入ってください」

「「「な？」「」「」

ち！やっぱそう来たか・・・

次はあたしとカブトだったんだけど・・・

「（どうしよう・・・姉ちゃんが真剣な顔で殺気レベル3だったばよ・・・）」

「なんで変更だ？」

アスマがいう

「シカマル！早く行って来い」

「な！？セツナ！？！？」

いのがなんでって顔でいう

「いいから！早く行け」

「あ・・・ああ・・・」

シカマルは は？みたいな感じで走って行った

あたしとカブトの戦いを遅めたのは絶対こうだ

シカマルとの対戦後あたしとカブトを戦わせ、大蛇丸は火影を殺したあと

カブトはあたしを限界までチャクラを使わせ試合終わりとわざと負け油断したすきに気絶させ

あたしを連れ帰る……

そういうことが考えられる

「っち！どーせ結界術を使う奴等がいて暗部の者も戦えないようにしようってことか・・・」

もつと封印術、結界術、医療忍術も修行しとくんだった！

最近、忍術と体術しかしてなかったし・・・

ナルトも封印術、結界術を使えないし、当然結界を破ることもできない一応幻術返しは修行させたけど・・・

「こんちくしょうが！ー！！」

思わず壁を殴りかかったが壁を一枚破壊してしまった

「どうした？セツナ」

カカシ先生・・・あんた何もマジで知らねーか・・・

「言っけど・・・警戒はしないで。」

「ああ、言ってみろ」

「あそこにいる風影は大蛇丸です」

「「「「「えええええ!??(何だと!?)「「「「「」

おいおい・・・いのとかも驚いてどづする?・

プリンはカaramelがなかったらうまくない(後書き)

はい！終わり方悪いけどまた次回！

あじゃぱー(＊＾＾)v(黙り　よー)

逝くもの（前書き）

ひゃっほー！！

こんにちわ（ ^ o ^ ）

いやあああああー

早く中忍試験のとこ終わらして疾風伝行きたーい！！

逝くもの

「それはどういつことだのう！？セツナ」

「いや、だから大蛇丸が風影。大蛇丸が風影殺して大蛇丸は風影に化けて今三代目の横にいる」

「「「「「な！？」「」」」」

「本当だ・・・チャクラの感じが邪悪な感じがするってばよ。」

「そんなのあんた分かるの？ナルト！！」

「サクラ。少し黙ってて！あたしもナルトもこの1ヶ月ムダにしてきたわけじゃない。」

「・・・」

「で話を戻すけど、シカマルとの試合の後あたしが試合に呼び出される。あたしとカブトが戦っている

隙に大蛇丸は観客のみんなを幻術にかけ、三代目と戦い勝負がついたらあたしを気絶させ

アジトへ連れて行く・・・という設定じゃない？」

「ありえるな。」

どこからともなくいきなり綱手とシズネが現れた

え．．．？

あんたさんの出番も少し先じゃ．．．！？？
by 作者の仕業です

「綱手!？」

「久しぶりだな。自来也」

「確かに、木の葉に結界術を使える者はいますがセツナほど使える人はいないでしょうね」

「そう！シズネの言うとおりだ。大蛇丸もそれなりの部下は連れてきているはずだ。少なくとも結界術は優れている4人はいる。」

「姉ちゃんなら1人でもいけるけどな」

「いらんと言わんでよろしい!」

バキ！！

「いったあ！！」

「強くなっても頭のところはあまり変わってないな」

「うるせえ！キバ」

「んだとお！？」

「まあ、とにかく上忍何人かは三代目のそばにいた方がいいわ」

「紅の言うとおりだ！！青春パワーでがんばるぞ！！」

「あ！シカマルリタイアしたみたいだよ。もぐもぐムシャムシャ・・」

「うっそお！？アイツ何してんのぉ！？？一発しめてやる」

いのこわあ！！
目がこわい
！

「もう！いのかわいい顔してんのに怒ったらダメよ。」

「セツナったらもう上手なんだから！！」

とかいいつつけっこう顔にやけてる

「ふー・・・めんどくさかった・・・」

「シカマル！あんなねえ！！」

「はいストップ！いのさっきも言ったけど・・・」

「あー！」

「サクラ？どうしたの？？」

なんとなく聞いてみる

「そういえば、シカマルとセツナってむっちゃくちや仲悪かったのに最近ケンカしてないよね？」

「「確かに・・・」」

はもったあああああああああああああああ！

「あときは若かったんじゃない？」

「ばーちゃんみたいなこと言わないの！」

「いのナイス突っ込み！」

「意味わかんないわよ！」

「まあ理由としてはめんどくさい……ってまたはもったー！」

「あんたたち本当仲いいわね！」

「うんムシャムシャ……」

「チヨウジ食べるかしやべるかどつちかにしろよ・・・」

「ごめんシカマル。ムシヤムシヤ・・・っばい！」

チヨウジのそばには袋がたんまりと・・・

その瞬間だった

目の前に天使の羽がまいてきて眠気が誘う

！

幻術！！

急いで印を結び言う

「解！！」

やっぱりそうだ！

観客が寝てる

起きてるのは上忍とシズネさん、自来也さん、綱手さん

下忍ではサクラ、ナルト、あたし、シカマル

我愛羅とテマリ、カンクロウは原作と違いどうやら何も知らないように起きている

我愛羅は暴走し始めてる

木の葉崩しは音と大蛇丸だけで行うのね・・・

あたしは急いで三代目の元へ向かう

グサ！！

床にクナイが突き刺さっている

「カブト!!」

「大蛇丸様の邪魔はさせないよ!」

「ちい!

「真正面に向かってくるとは思わなかったわ」

ナルトは我愛羅の元へ暴走止めに行った

「当たり前だ君に僕は倒せない。いや・・・その前にこれを見せよう」

「何!??」

ドス！

目の前にいるのは血まみれの白だった

「嘘……」

「嘘じゃないよ。現実だこれは僕がやったんだよ。」

白が……白があんたに負けるなんて……

あたしは急いで白のところへ走った

よかった。まだ息はある

「シカマル！白を安全な場所へ！」

「分かった！」

「あたしも！」

サクラ、シカマル・・・たのんだわよ

いま見たらサスケも我愛羅のところにいた

ドスーン！

三代目の方を見たら何か木が立っていた

ナルトの方は早くも我愛羅がたぬき寝入りに入っていた

はやあ!!

「もうすぐで大蛇丸さまのとも終わる。話はこれでおしまいだ」

そついい手にチャクラを集めだした

「つるせえ……お前はマジで殺す」

もう限界・・・

何の関係もない白をあんな目に・・・

殺気レベル、戦闘モードともに5！

（10までいったらチャクラもつたいない！）

「安心しな・・・一瞬で終わらせてやる」

「な！？？」

カブトは地味にあせている

あたしの殺気を感じに上忍もびびっている

自来也さんと綱手さん、シズネさんは大蛇丸の元へ行つた

「螺旋丸！」

「ふっふ」

「ふっふ」

カブトはもろに食らった

けど腹にダメージがいっただけ回復する前に手を打つ

水がないここは水遁も限られてくる

なら！

「雷遁 雷銃弾！！」

どんな技かは想像におまかせします

ドドカーン！！！！

「はあはあ・・・どうやら、大蛇丸様の方は終わったみたい・・・だから僕も失礼・・・するよ」

ポン！

「まったく逃げるのは早いんだから・・・」

本当は大蛇丸のそこへ行きたいけど白の治療をしなきゃ・・・

「白！」

安全なところって言っても観客のうしろにいた

「姉……さ……ん」

「待ってて。すぐ治療するから」

ケガが見えない

涙がにじんで

でもよく見るとかなりの重症・・・

腹の出血がかなりひどい・・・

でも！あきらめない！！

チャクラが尽きようと絶対あきらめない！！

集中しても集中しても血が止まる気配はない

そのうちあたしの周りには疲れ果てたナルト、サスケ我愛羅にデマリ、カンクロウ

自来也さん、綱手さん、シズネさんも帰ってきた

どれだけ集中しても止まる気配のない血

そのぶんの涙がこみあげてくる

「姉さん……もう……いいです……」

「良くない！あたしのチャクラ尽きてもあたしはあきらめない！」

「再不斬さんも・・・死んだんです・・・カブトにやられ・・・姉さん・・・僕は姉さんのことを尊敬しています・・・僕にとって姉さんは・・・実の姉妹じゃなくても姉さんです。僕の大好きな・・・今まで本当にありがとうございました・・・」

「ありがとう白・・・こんなあたしを・・・尊敬してるって言うて

くれて・・・

大好きって言うてくれて・・・あたしは一生 白のこと好きだから!!」

そっつい白は笑い目を閉じた

あたしは上げたこともない声とあふらだす涙が止まらなかった

「うわああああん!!」

そしてしばらく泣いていた

ナルトもサスケも幻術から覚めたいのたちも綱手さんもみんな暗い顔でただあたしと白を見ていた

そして三代目 猿飛ヒルゼンの死もあり、みんなうつむいて暗い顔をしていた

逝くもの（後書き）

話しの内容暗い！！

p s

綱手はなんで今の綱手？
ということですが・・・

原作でナルトと綱手が賭けをするでしょ？

あれを螺旋丸じゃなく違う技でかけていたの事です！

原作の奴が何年か前にあったと思うといってください

火影は予想通りでよろー（＾o＾）

決意（前書き）

今回は少し暗いです（<―>）

決意

あれから数日

三代目と白、再不斬 今回の戦いで失われた人の葬儀が今日行われる

そしてセツナ、ナルトは白がいなくなったので一緒に暮らすことになった

「姉ちゃん、時間だってばよ行こう。」

「うん。今行く」

あたしはあれから長時間泣いていた

なので決めた

泣くのは最後にする

あたしたちは葬儀の行われる場所まで行った

そしてみんなはもう着いていた

木の葉丸は泣いていた

まあそりやおじいちゃん死んだら泣くわな。

あたしは泣かない

というか暗い顔もあんましない！！

みんなから見ると強がりに見えるけどこれでいい

そしてあたしは1つ大きな？決断をする

修行の旅に出る

あたしがもっとしっかりしていれば白と再不斬は死ななかった

「おい、お前ら花やってこい」

カカシ先生に言われて気づいた

もうあたしたち下忍の番なのだ

いつのまにか雨がやんでいた

そしてあつというまに葬儀が終わった

いるか先生なんか言ってたと思うけど聞いてなかった

「姉ちゃんそれじゃ帰るってばよ」

「うん」

帰ろうと思ったところに綱手様が呼んだ

「シカマル！セツナ！ちょっとこい！！」

え？？

もしかして・・・

アソコさんとかイビキとかいるんだけど！

「おめでとう。今日からお前たちは中忍だ。」

そうだ！！

旅のことっておう！

「綱手様！ちょっといいですか？」

「?なんだ??ベスト着たくないんだったら別にいいぞ。」

「よっしゃ!ってそうじゃなくて!」

真剣な顔でいう

シカマルとかまだいます

綱手SIDE

「修行の旅に出る許可をください」

「「「「!!!」」」」

「セツナ・・・白と再不斬のことだがわたしも三代目のそばに
ながら結果はあれだ。
未熟でくやしいのは分かる。だが」

「確かにそうです。あたしがもっとしっかりしていれば、死な
すんだ
それにもとは言えば、あたしがまいた種ですし・・・でももうあ
んな思いするのいやなんです！
もう

誰も失いたくないんです!!」

「!!」

「セツナ・・・お前は本当にクシナとミナトに似ているな」

「え？」

いやナルトも似ている不思議と賭けてみたくなるからな・・・

「いいだろう！ただし！！音隠れ、大蛇丸のもとへ行くのは禁止とする

あと2年以内に帰ってこい！！いいな？」

セツナはえらく満面の笑顔で言った

「はい！」

SIDEアウト

うっしゅ!!

まず・・・旅に出るのをみんなに言おう

そして出る

「ね、ばっちりじゃー！ー！ー！」

決意（後書き）

次回 感動の別れ！？？

ほーたーるのひかり窓の

(前書き)

ははh!!

覚えてないぜ(^o^)

つーか卒業式うたったの「旅立ちの日に？」
やったし!!

ほーたーるのひかり 窓の

でも、ナルトに旅に出ます!!

つつたら絶対ついてくると思っんで・・・

こっそり置手紙残してていこう（笑）

うん！これしかないんだ！！

深夜12時

置手紙を残し必要最低限の荷物を持って出ていく

ごめんね・・・ナルト。

出ていくと・・・

なぜかサスケ発見

ってかベンチにサクラ寝てる・・・

なぜ??

「セツナ・・・」

「あれま？サスケ？？どうしたの！??」

「それはこっちのセリフだ。」

「あたしね修行の旅に出るの。2年ぐらいで帰るつもりサスケは？
？」

「俺は里を抜ける。」

「はい!??」

「今のままだとイタチには勝てない。だから里を抜け力をつける」

「そつか・・・さびしくなるね・・・」

少しがっかり・・・

そうするとサスケは顔を赤くしせきばらいをしていた

「いや・・・でもいつか里に帰ってくる・・・それかお前に会いに

行くから」

「ほんとう！???よかった!!」

サスケは顔が余計に赤くなった。
熱あんじゃない??

「ほんじゃね。」

「ああ」

朝起きるといつものご飯のにおいがしない

ナルトSIDE

おかしいってばよ？？

いつもはそこにおいで起きるのに・・・

不思議に思いリビングに行くとテーブルに大きい分厚い封筒と朝飯
が置いてあった

封筒開けると

ナルト

サクラ

カカシ先生

ヒナタ

いの

シカマル

など俺ら同期の名前の手紙とその先生名前の手紙があった

あとエロ仙人と木ノ葉丸のんだ

心臓がときどきしてる・・・

俺は急いで着替えて日頃セツナにきつく言われて来たせいか
鍵をしめ手にはみんな宛ての手紙と封筒を
持って走った

そして「あん」と大きく書いてある門に行った

息切れをして姉ちゃんからの手紙を見る

女の子らしいかわいい字・・・

間違いなく姉ちゃんが書いたものだ

” 愛する弟へ ”

いきなり驚かせてしまつてごめんね。

姉ちゃんは修行の旅に出ます

きっかけは、白と再不斬が死んで自分の未熟さに腹だてたからです
それにナルトの中にいるものをナルトに悪影響をかけないよう九尾
のチャクラを操る
力もつけるためです。

勝手に何もいわず出て行つたばかな姉を許してね。

きつとナルトに言えば俺も行く！って言うと思ったから・・・

今回の旅はあたし1人でしたいので勝手に出て行きました

あなたも自来也さんに修行をつけてもらったらいいと思うわ

それとあたしがいないからって夜遅くまで起きないこと！

早起きは三文の徳！

掃除もゴミもめんどくさがらずちゃんと毎日しなさい！

ご飯もラーメンばっか食べないこと！

洗濯もためず毎日しなさい！

あと布団もお天気の日には干すこと！

出かけるときは鍵閉めを忘れない！

任務では仲間を信じあんまり迷惑をかけちゃダメよ！

以上のことを絶対守りなさい。

あと白と再不斬の墓・・・手入れしといてね

あたしは2年で帰る

だから心配しなくても大丈夫

最後まで口づるさくてごめんね。

” セツナより ”

「 本当に・・・口づるをいってばよ
「み

「 ナルト？何してんだ？？」
「

「 シカマル？
「

「 ナルト？なんかあったか？？お前なんかすっげー暗い顔してんぞ
？？
「

「これ」

「ん？」

俺はシカマルに手紙を渡した

ほーたーるのひかーり 窓の

(後書き)

はい！！この続きはサスケ奪還任務です！

気にしないこと！

それではまだもう少しセツナがいなくなつた木の葉の里のこと書いて疾風伝行きたい
と思います！！

ラーメンってほんとくとマジで量増える(前書き)

タイトルの意味特にありません！

ラーメンってほんとくとマジで量増える

セツナがいなくなったことはすぐに里に知れ渡っていた

それと同時にサスケが里を抜けたことも

ナルト SIDE

しばらく落ち込んでたがエロ仙人とカカシ先生やシカマルの励ましのおかげで
なんとか立ち直ったってだよ！

サクラちゃんに手紙を渡し見ているときの表情を見ると

サクラちゃん、ヒナタ、いのは泣いていた

テンテンはすっげえ暗い顔してた

エロ仙人と俺ら同期の先生たちは難しい顔していた

綱手のばあちゃんにみんな責めてたけど

「セツナは強くなつて帰ってくるに違いない！お前らは素直にセツナが強く帰ってくることを信じて待つてはおらんのか！-」

と一括され

シズネの姉ちゃんは

「綱手様はああおっしゃていましたが、綱手様も旅に出ることを反対されていたんです。もちろん里を出て行ってさみしいと思うのも一途あるのかもしれない。」

私もそうです。

これからは手伝ってくれる人がいなくなったりすると・・・。」

もつここからはほぼ愚痴

で

今からサスケ奪還任務だつてばよ！

絶対連れ戻して見せる！！

そして2年後

SIDEセツナ

髪は背中までのびているもち色はそのままですトレート、前髪は母さんみたいにピンでとめようとおもったけどそこまで伸びてないから

前髪を感じを母さんに似せて足りないところを編み込みをしてピンでとめてる

服もち新しいのん！

前回同様で違うのは着物の柄が花柄になって額あてを長くして帯がわりに使っている

下は左もものところが縦にせんを入れて見えている状態ひだりももが

黒スパッツははいています！！

腕は上腕から指の第一関節まで黒い手袋

荷物はリュック！

で久々に里に帰る

「あん」と書かれた門をくぐる

「本当に久しぶりだってばね!!」

特に変わってない里

さっそく綱手さんのところに行くとしますか！

ラーメンってほんとくとマジで量増える（後書き）

はい！

来ましたキヨシ！（意味わかんねえよ！）

ついに疾風伝！

マジで久しい感じ！やっほお！（前書き）

上のタイトルは作者が思っていることです。

それでわレッッゴー！

マジで久しい感じ！！やっほお！

さてさて・・・

綱手様のとこ行くと思いますか。

コンコン

一応礼儀正しくノック

「入れ！」

お！綱手様の声懐かしいな〜！

「失礼します」

ガチャっとな

「セツナ!？」

「はい。ただいま戻りました」

そんなにビックリするかな・・・？

「セツナ！？」

「ん？おー！サクラ！！お久ー（＾Ｏ＾）」

「もう！勝手に出て行かないでよお！ばか！」

「んごぶー！..」

抱き着かれる力が半端ねえ・・・

「ごめん、ごめん！」

「お前本当に顔はミナトで髪はクシナだな・・・前髪をあみこみしてなければクシナと間違えていた」

「そうですか？あんま身長ものびてないし・・・ナルトは？」

「ナルトもしばらくしてから自来也と修行に出ていった。もうすぐで2年だ」

「そうですか。」

「セツナ・・・サスケ君が・・・」

「サクラ知ってるよ」

「え!??」

「実を言つと・・・出ていくときサスケに会ったの。止めてもムダだと思つたから」

「そうか・・・で修行の方はどうだった？」

「ふふん!新しい術作つたし、医療忍術と封印術もばっちり!チャクラを抑えるのもちゃんとしたし!」

「ほう！そうか！じゃあ・・・お前上忍試験受ける」

「はい！？？」

「お前なら大丈夫だろ。」

「えー！？？・・・いつですか？」

「今から」

「なに！？？」

おいおい！試験内容やべーんじゃ・・・

で試験場に行って試験をしましたとさ

内容はシークレットで

試験後

あーで結果・・・

上忍になった人 あたし ネジ

だけかよ!??

「セツナ!」

「おー!いの! (その他ナルト以外の同期と先生)」

「帰ってたのねー！」

「ぐっふー！」

いの．．あんたも カクソ強い．．．

「セツナちゃん！上忍おめでとう」

「ありがとう。ヒナタ」

「お前も俺と同じレベルなんてねえ．．．」

「カカシ先生！」

「しかしお前これまたクシナさんとミナトさんにそっくりだな・
」

「綱手様にも言われた。」

・・・シカマル・・・背伸びただけであとあんま変わってない

「あ？なんだよ？」

コイツってイメチェンとかしないタイプだな・・・

「セツナ！」

「テマリ！」

「お前も上忍か。」

「へへ！つておお！？？」

そーいやシカマルとテマリつて仲いいな・・・

なるほど！そういうわけね

「それにしても髪長いなあ。」

「うん？切った方がいい？？」

「「「「いやいや！！そういうことじゃなくて！！」」」」

みんなに全力で拒否られた（笑）

「そーだ！」

「何？いの？？」

「セツナ！一緒に焼肉行かない！？？久しぶりに話したいこといっぱいあんだから！」

「賛成！！」

「あたしも行く！」

「わ・・・私も行きたいです・・・」

「じゃあ、あたしも行くかな。」

で夜遅くまで話たとさ。

マジで久しい感じ！！やっほお！（後書き）

次回いつきにナルト帰ってくるとこ書くよ！！

再会ってか!! (前書き)

はい。

今回は報告通りナルトと再会場面でーす!!

少しあれ・・・おもんないかも・・・

再会ってか!!

上忍だったが、あんま変わらず過ごしている

まあ、まず久々に家帰ったら・・・

部屋が汚い

まあ、2年も放置してたらこうなるな・・・

つーことで打ち上げして夜8時ごろ帰ってきたが、まさかの大掃除

まず、水ぶきしてほつきではいて窓ふいて台所掃除して
便所掃除して

布団をナルトのんとあたしのんクリーニング出して

ついでに銭湯いって風呂はいつて寝るとこないから いの の家突
撃訪問して

お泊り2、3日して

ようやく家に帰ってきたのが今日

やっと2年前の生活に戻ってきた

「やっぱり自分の家って落ち着く!!」

あたしの家って風呂ないからわざわざ銭湯いってるんだよ・・・

まあ、それは置いてここ数日テマリがうちの里にいる

上忍試験が終わったら次は中忍試験・・・

かわいそうに係の人に当たったテマリとシカマル

でも最近あの2人いい感じだと思っけどなあ・・・

なんとなくベットに座っているあたし

たまたま机にある写真建てに目がいった

原作のやつでサクラの横にセツナがいると考えてください

あのあと結局撮り直したんだよ写真

ま、姿変わったらねえ・・・

あたしの顔はやさしく笑っている

ミナトみたいな感じで

そーいやあたしの顔ってよく父さんに似てるらしい

2年前に両親に会ったけど、あたしが顔変わったのと真実知ったの
で精いっぱいだった
からあまりよく覚えてない・・・

時間見ると1時

「っと！いけない！！昼飯食べてない・・・」

いまさら作るのもなあ・・・

「久しぶりに一楽行こうっと！」

げふ！

食い終わったあと

一楽

うん！食った食った！！

やっぱりこんつチャーシューおいし！

で横見る

電信柱にナルト立ってる

下に自来也さん、サクラ、木ノ葉丸その他

ウドンと……女の子って誰？？

マジで知らない

「……」

どうしょ……このままスルー？

今から白と再不斬の墓参り行こうとしたんだけど・・・

「姉ちゃん！」

はい！見つかった

まあ会いたかったからいいけど！

「ナルト久しぶり」

そっついあの写真のようにやさしく笑った

でナルトは電信柱から降りてきた

サクラと木ノ葉丸、その他ガンスルー・・・

そしてナルトはあたしを抱きしめた

「たのむから・・・もう勝手にいなくならないでくれってばよ」

ありゃ・・・悪いことしちゃたな・・・

「ごめんね。ナルト」

そして抱き返した

「で、ナルト身長伸びたね」

「へへ！！姉ちゃんに勝ったってばよ！」

「いや・・・でもセツナお前本当に・・・美人になったのう。
尻も胸もバインバインだのう。」

「変態行為で訴えますよ？」

「いやいや！でも本当に美人になったのう・・・（こりゃ将来が
楽しみだのう）」

「ナルト兄ちゃん！」

でここからは原作通りで

「姉ちゃん今から何すんだ？」

「ナルトは綱手様のところでしょ？あたしは白と再不斬のお墓参りに行ってくるね」

「分かったつてばよ」

で花買いたいけど、そうしたら1週間は生活できないから花なしで
行く

再会ってか!! (後書き)

はい!

次回 カカシVSナルト、サクラ、セツナ

墓参り（前書き）

話ヘンだろ！??

ってとこ普通にっつこんでください。

アニメしかやってないことも少しやるかも・・・です

墓参り

ここは、木ノ葉の里の墓が集まっているある場所

椿山 白

桃地 再不斬

そう書いてる墓の前に立っているあたし

さっそくバケツに水をくみその水で墓にそそぐ

「ごめんね。全然墓参りしてなくて・・・再不斬も白も花そえられなくてごめん
お金足りないから・・・」

そして墓をピカピカにしあげた

「・・・ねえ白。あたし強くなったかな？技とか封印術とかきわめて九尾のチャクラを

あやつれるように頑張って可能にして、医療忍術とかも少ないチャクラでケガがすぐ治るよう頑張って・・・」

あのあとから、どんなことがあっても泣かないと決めた

ちゃんと守ってるんだよ。

「でも・・・どうしても墓参りに来るときは切ない表情になっちゃうな。」

さてと・・・そろそろ帰って晩御飯の用意しなくちゃ・・・

「姉ちゃん！」

「あれ？ナルト。サクラも・・・2人そろってデートですかい？」

「ぶー!!」

「んなわけないでしょ!!セツナまで!!」

とかいって結構顔赤くなったりしてんだなこれが

「っで・・・何かよう？」

「今から第四演習場に行くんだってばよ！」

「修行の成果を見せるため、カカシ先生と戦うの！」

「おりゃまあ・・・懐かしいなあ・・・」

移動しながら話してます

「そっでしょ！？あたしたちが初めて集まった場所もそこだし・・・」

「だね。」

「つと！着いたってばよ！」

「さすがカカシ先生まだ来てないね」

「っしゃんなろー！まだ治ってないー！」

「もうー！遅いってばよ！」

1
0
分
後

「お？そろってんな」

「」「遅い！（つてばよ！）（つてばね！）」「」「」

「いやあ・・・今日は迷子になってしまった猫を見つけて・・・」
「はい！嘘！！」」「」

「でも、先生にしては早い方だったわね」

「俺もそう思っつてばよ！」

「あたしも！」

「（俺完ぺきなめられたな・・・うん）さてと！勝負は俺からこの鈴をとってみる！」

鈴の数は3つ

あのころと変わってない

「ルールも2年前と一緒よね？」

「せーかい！まあ・・・あのころはサスケもいたがな・・・」

ズーン!!

「そうだってよ・・・俺が弱かったばかり・・・ぶつぶつ」

「あたしじゃサスケ君を止められなくて・・・でもセツナだったら・・・うう・・・ぶつぶつ」

「あたしはサスケの言った言葉を信じるしか・・・がく!」

やっぱりあのとき止めとけばよかったのかなあ・・・

あこのころのあたしって結構ばか？

今ごろ気づいたのかよ！！

そつだよねえ・・・あのときサスケが言った”俺は里にまた戻ってくる”

ってこと信じる・・・よ・・・

「あちゃー！こいつらの前ではサスケは禁句だな・・・」落ち込

んでも

始まらないだろ!?!じゃあ行くぞ!?!よい・・・スタート!」

墓参り（後書き）

次回やつと勝負です！

予定遅らせてすみません（＜
―＞）

祝 お気に入り50件突破!! (前書き)

いやいやいや!! 久々に自分の小説検索してみたら50件超してる
じゃん!!

＼(。□＼)(／□。)／

これも、みなさんが見てくださっているおかげですm——)m

というところで記念会??やらせて頂きます!!

祝 お気に入り50件突破！！

「はい！というわけできましたきよし！！ついにこの小説お気に入
り50件突破っす！！」

「ちゅーわけでなんとなくパーティしてちょっとインタビューをし
たいっばよ！」

「あー！つと司会はあたしセツナとナルトでいかして頂きます！！」

「んーとまずカカシ先生！この小説が50件お気に入りされた感想

「は！！？？」

「え！！？？俺！？」

「だそうです！」

「え！！？？ちよつと姉ちゃん！！それはさすがにひどすぎだつてばよ！」

「嘘だろおい！俺のセリフこれだけ！？」

「じゃあ次！自来也さん！！！」

「「ガンスルー!!」」

「感想かのう・・・まあ！わしはうれしいぞ！自分が活躍できる場面が増えてのう！！がっはははり！
それにしてもセツナ・・・お前何回も言っが素晴らしいばんきゅぼん！だのう！」

「次言ったら殴り飛ばすんで。」

「姉ちゃん！抑えて！！っと次は・・・んーとヒナタ！」

「え!??あの・・・と・・・とりあえず見てくださりありがとうございます。」「

これから見てください。」「（いつ見てもナルト君の笑顔って暖かいなあ・・・）」

「堅苦しいわねえ・・・ま!いいとして・・・何しよう!?!?」

「そっだよなあ!いきなり作者に記念会しろって言われてもな・・・」

「っておい!火影である私を忘れるな!!!」

「あー！忘れてたっばよ・・・」

「で感想は？」

「まあ私としてはだな・・・まだ50件だ！！ほかのは100とか200いつてんだろ！？
この小説も100とか200いけ！！」

「そこは作者の問題です。」

「というわけでいきなり飛び出てジャンジャッジャーン!!作者だよ!」

「うわ!出たあ!」

「ナルト・・・作者にそれはないでしょ!???出番減らすぞ!」

「じゃあここで作者の好きなナルトの歌とか!」

「オープニングは・・・ブルーバードとかホタルノヒカリとか?!
!のやつ

エンディングはfor youとforeverとか!」

上の英語が読めない人はおうちの人にきいてみよう!

「好きなナルトの編!?は」

「ペイン!!!!!!!!!!」

「好きなキャラは!?!」

「サクラ以外」

「ひつどいつてばよ!?!」

「ここだけの話・・・ナルトには悪いけどサクラのどういうところが嫌いつて!?!」
「サクラがナルトに嘘告したやつあるじゃん!?!あの件についてはほんまいや!」
「嫌いになった理由の一つ!?!もう一つは泣きすぎ人間泣いたら終わりとか思うな!」

「はい！見てる人今作者いったこと忘れるように！」

今の話しはナルトには聞こえてません

「じゃあ一応このへんで・・・」

「ってちよつと待ちなさいよお！！なんであたしだけパーティーに呼ばれてないの！？
しゃんなろー！」

「それではまた次回（*^ ^）v」

久々に手合せだ！（前書き）

はい！やっとカカシとの勝負？です

じゃ行きますか

久々に手合せだ！

カカシ先生のスタートによってみんな隠れた

さてさて・・・

鈴とつたらジ・エンドだから少しカカシ先生と遊びたいから
始めは少し本気を出させて頂きますか

で隠れてた場所が三人そろって同じ……

「えらくすごい偶然ね……」

「うん」

「まあ、不自然だけどセツナがいたらだいぶと楽ね。みんなで協力して作戦立てるわよ」

「まあ……今回は本も読んでないし、写輪眼開眼してるし少しやっかいね」

「ここが見つかるのも時間の問題だわ」

「どっするんだってばよ？」

「楽しいおしゃべりはそこまでにしようか？」

「んげ！カカシ先生だつてば」

「当たり前よ。サクラもナルトも何ビシクリしてんの？気配も消せずしゃべってたらばれんにきまってるでしょ」

2人とも”あ！！”って感じ

まあ、ここで修行の成果見せてやる！

「水遁 水流弾の術！」

バツシャアアア！！

さすがはカカシ先生・・・よけたな

「見つけた！っしょんなろー！」

「おっと！」

はぎー！！

「あぶね．．．あれは綱手様直伝怪力．．．おそるべし」

「よそ見してる暇なんかねえってばよ！」

「何！？」

ナルト．．．虎の印．．．

まさか！？

「でおりゃあ！」

「おっと！」

すか！

普通によけられた

「いや・・・いまのはマジで危なかったな。別の意味で」

あれって絶対木ノ葉千年殺し（カンチヨウ）だよね・・・
ナルトは火遁使えないし

さて・・・作戦を練るとしよう

「水遁 水霧」

「な！？？（霧がでた）」

「前がみえねえってだよ！」

「本当に真っ白・・・」

でこの間にサクラとナルトを連れ出す

「あれ！？見えた・・・」

「って姉ちゃん！！」

「し！今のはあたしの術よ。でもあの霧だつて少しの時間稼ぎにすぎない。

相手がカカシ先生となるとね・・・」

でそこからナルトとあの作戦を立てるというわけです（*^^^）
v

久々に手合せだ！（後書き）

なんの作戦かは・・・

分かりますよね？

ヒントは

カカシが読んでるあの本です！

イチャイチャタクティクス（前書き）

タイトルからしておかしいよね ^ m ^

作者は期末テストの勉強で疲れております

それでは本編へ！！

ヒーハー！！

イチャイチャタクティクス

はい！原作通りあの作戦でカカシ先生に立ち向かおうということ
です！！

「ナルトの発想通りで行くんで・・・じゃあみんなついてきて!!」

「了解だつてだよ!!」

「OK!!」

そろそろ水霧の術の効果が薄れてきている

「!!」

あたしは急いで後ろに”とまれ”の合図を送る

「どづしたってばよ!?!」

「あそこ・・・見て」

カカシ先生があたしたちを探している

「ぜっここのチャンスってわけね!」

「そついうこと!じゃあみんな行くよ!?!」

アホみたいに飛び出てナルトが大声で

「イチヤイチャタクトイクスの最後に実は主人公が・・・」

カカシ先生はネタバレがいやなんで耳ふさいで写輪眼も閉じてくれました？

「いや・・・まさかこれが敗因だなんてな・・・」

「カカシ先生。本は最後まで見ましようね。」

「そうだってばよ!!」

「うんうん。」

以上！カカシとの戦いでした

イチャイチャタクティクス（後書き）

次回からは任務 暁との接触事件？について書きます！

いざー!!砂隠れの里へ!!(前書き)

はい!!

じゃあ行ってみよー!

いざー!!砂隠れの里へ!!

次の日

待ち合わせ場所にナルトと一緒に行きました!!

「いやー・・・久しぶりの任務だつてだよ!」

「うん!!あたしも!!」

「それにしてもカカシ先生・・・遅いわね・・・」

「いつもの事だけど」

「やあ!諸君おはよう!!今回は真面目に書類書いてたら遅れました。」

パ
タ
パ
タ

「
「
「
遅い！
！
！
」
」
」

空を見ると砂隠れの鳥・・・確か一番はやい奴!!

しかも緊急用!?

何かあったのかしら・・・????

「姉ちゃん！カカシ先生！早くいくつてばよ！！」

「うん！」

「ああ」

任務受付

で任務がCランクで綱手様に文句を言ってるナルト

まあ・・・予想通りってことで

するといきなり、ドアが開いた

「綱手様！大変です！！」

「なんだ？」

そついい綱手様に巻物を渡す

しばらくすると、綱手様の顔つきが変わりこつ言った

「カカシ班！任務変更だ！！タベ 砂隠れの里に暁が現れ風影を連れ去った。

向こうは助けを求めている。ただちに砂隠れの里へと向かい、砂の忍びの言うことに
従え！！」

「「「「はい！！」」」」

で超ダッシュで木ノ葉の里を出て行ったらテマリと会い事情を話し
ともに行動することに

そうすると、サクラがナルトに九尾や暁の事を問いそれにこたえる・
・

という感じで砂の所へ行つたが・・・

砂嵐に巻き込まれたー！！！！

まさかの!？

まあ・・・疲れてたからいいんですけど・・・

ナルトはじっとしてられないね・・・うん。

いざ！！砂隠れの里へ！！（後書き）

短いですが、すんまえん！！

やっと着いた　！！と思ったらまた忙しー！！（前書き）

えー、みなさんに報告です。

そろそろあたすの学校期末なんで・・・

12月まで更新できないと思います

ご了承ください。

やっと着いた　！！と思ったらまた忙しー！！

砂嵐がやっと過ぎ去ってあたしたちは急いで走って

なんとか着きました（＾Ｏ＾）

いや・・・マジで疲れた

砂漠って結構暑いしねー・・・

で着いたら着いたで、砂の人に集中治療室に連れて行かれた

そこには原作通り、カンクローがサソリの毒にやられていた。

悲鳴からしてありやもう結構いつてるな・・・

「だいぶ重症ね・・・持って1日つてとこまで毒がきてる。」

「お前・・・叫び声だけで判断できるのか??」

チヨはあさんが話しかけてきた。

と思いきや、カカシ先生を白いキバと勘違いするし・・・

ナルトも暴れてる？し・・・

でもカカシ先生って白いキバの息子だからねえ・・・

「うるさい！！騒ぐのあとにしてください！！！！サクラ！！ボケー
としてないで

2年間の修行の成果を見せてみなさい！！」

サクラは、はっとして

「う・・・うん。」

といった

悲鳴からしてかなりやばい・・・

一応手をかざしてみる

!!!

もう、心臓まできてる・・・

毒が全体にしみてるし・・・

「うおおおおー!!」

えーい!! 考えてる暇はない!!

「みんな!! カンクろう抑えて!!」

みんなは抑える

「カカシ先生もナルトも……強く抑えてよ……もたもたしてたら死ぬわよ……！」

カカシ先生とナルトは急いできて、みんな力を強めた

どうする……って……？

この2年 忍術、体術、封印術、医療術・・・

そして九尾のチャクラを抑える修行をバカっというほどしてきた

ついに毒を道具なしで抜けるようになった

毒だけじゃない。

異常状態すべて

まず、カンクロウの体に毒が入ってきた場所付近からどんどん毒を治していく

そして最後のトコだけ

「ボウル持ってきて!!!」

そして触らないようにその毒をボウルに静かに入れる

「よし!!これで毒は消したわ。あとはこの抜き出した毒を調べて薬を作るわ。サクラ手伝って」

「サクラ、あたしは念の為カंकろうについでる。

サクラは薬を作って!!

綱手様の横にいたんでしょ??」

あたしは笑ってみせた。

サクラは、はっとして

「うん」

と決意した顔を見せた

やっと着いた　！！と思ったらまた忙しー！！（後書き）

なんか・・・チートすぎたかも・・・

サクラファンの人すんません。

無題で・・・（前書き）

やっと期末終わったぞい！！！！

点数も終わったぞい！！！！

じゃあ行くぜい！！

無題で・・・

薬作りはサクラに任せてる

なぜかというと・・・

まあ、原作通りサソリと戦うとき薬があったから助かった・・・

つーわけでサクラに任せた方がいいっしょ・・・

というわけですよあ

じゃああたしどうしますかね・・・

ディダラ殺るのは、まだ少し早いしなあ・・・

まあ、そのときはそんなときで！！

で

その薬を今カシクロウに飲ませるとこ

「じゃあそろそろ・・・我愛羅を助けに行きますか。」

「セツナ・・・なんかキャラ変わってない??ナルト化してるけど。」

「カカシ先生頭悪すぎです。カンクロウ、サソリと戦ったときになんかサソリのおいのついた物持ってない??」

「ある。俺のカラスの手にそいつの服の一部を握らせてある。あと敵は2人・・・1人は我愛羅を連れてる我愛羅のおいを追えばいい」

カンクロー、そのサソリの服の一部ちょいと貸して。」

779

「口寄せの術！ いずみ！」

ぼふゆん!!

煙の中から出てきたのはいずみ!!

みんな覚えてるかな??

「これは・・・」

「カカシ先生もパックンとか出してください。」

「分かった。口寄せの術!!」

で八忍犬が出てきた

「みんなこのおいを覚えてくれ。それでは・・・散ッ!!」

「いずみもこのチャクラの感じ覚えておいて。」

「分かりました。」

「セツナ、その兎は・・・」

「いずみと言って大きくなったり小さくなったりできて、相手のチヤクラのついた物、人を見れば覚えることができます。だから追跡にも向いています。」

「セツナさん、覚えました。」

「分かったわ。それじゃあそろそろ行きましょう。」

「ああ。」

「了解！」

「っし！ー！急ぐってばよー！」

「うずまきナルト・・・弟を頼む」

「まかしとけてばよ。
オレもいずれ火影になるからな！今から風影に貸し作っ
といてやる
よ。」

無題で・・・（後書き）

いずみについてはまた詳しく書きますんで・・・

お楽しみに！！

出発ってか（前書き）

昨日更新しなくてすいませんっした。
言い訳もアレなんで行きましよう！

出発ってか

さっそく出発ってわけですが・・・

砂の人が原作通りチヨばあさんでござえます

ちょっと、なんか不安だな・・・

だってカカシ先生と白いキバことサクマさん あってます？
間違えるんだもん！

で行く途中 尾獣の話がある

「コントロールができるもんじゃないけどな。」

チヨばあさん・・・あたしできるんだけど・・・ちょっとだけ

まあそれはいいとして・・・ナルトはどうやら自来也さんとの修行中
四本目が出て意識がなくなり九尾に支配された・・・

自来也さんに話された

そして押さえるとすぐに九尾のチャクラがおさまるなんか、紙もらった

これは緊急事態のときに使おう

でも・・・これは姉として言うとした方がいいのかな？？

まあ、時期を待とう

「！みんなとまれ」

カカシ先生の合図でみんなとまる

「！！」

「うち！！もう出てきたか・・・」

「・・・誰？」

「・・・いきなりですか・・・」

「……………やつ……………あの目……………」

「うちは……………イタチ!」

「みんなあいつの目を直接見るな……………危険だ!!」

「いいや!あいつは瞳術だけじゃないわ!」

「……………よく知ってますね。」

本見たらわかるっさ!!
29巻!

「まあね・・・」

「じゃあどうやって戦うの!?!」

「気配とか足の動きだけで判断するのよ。」

「セツナ! お前も手伝え!! もう上忍だから・・・」

「分かってます。」

イタチ・・・本人じゃないか・・・

なんかチャクラというかなんか感じが違う

うちは一族って感じじゃないな・・・

「イタチ、本体はどこにいる？」

「・・・貴様なぜそれを・・・！」

「感じて分かる。うちは一族って感じじゃないか・・・でも敵の術

でこんなもんか・・・」

「それは本当か？」

「多分ね。おそらく暁の目的は時間稼ぎでしょう。」

もう我愛羅の尾獣を引き抜いてるところか・・・

「おしゃべりはおしまいにして・・・さっさとするわよ。」

抑えてた殺気を出す

出発ってか（後書き）

次回、戦闘開始！！

イタチVSセツナってことで（前書き）

こんにちわー！！

みなさん風邪ひいてませんか？？

作者は今風邪ひいてまーす！！

バカは風邪をひかないって奴・・・あれは本当なのか？？

イタチVSセツナってことで

さーてとー！ちよいと新術使つかそれともあたしのチート差が上がるか・・・

どっちでしょーね・・・

「少し遊びますか・・・」

「イタチってこんなキャラだったけ・・・??」

絶対ちげーよ!!

BY??

もうめんどいからどうしよ・・・

1、融合螺旋丸で一気にやっつける

2、原作通り進んであげる

3、後ろの人達にまかせる

2はないな・・・うん

そこまで親切じゃなくなたんだよ

3は楽だけどカカシ先生が許すわけねえか・・・

1しかねーじゃねーか!!

あーもう・・・挑発？なんかするんじゃないかなかった・・・

「ナルト！！アレの用意！！」

「分かったってばよ！！」

「アレ？？」

キューン!!

融合螺旋丸作ってマース

「よしできた!!」

「姉ちゃんあとは頼んだってばよ！」

「任せなさい！！」

チャクラコントロールで永遠に追ってやるぜ（笑）

幻術なんかかけられるもんか！

イタチを見ずに他の風景を見る

かすかな移動の音でイタチが何しようとするか判断する

「火遁！」「させるかー！！」「って何！？」

一瞬で移動する

「融合螺旋丸！」

バコーン！

「ふん！世の中スピードが大事になってきてんのよ！！」

瞬身の術じゃないよ？？

クナイ投げてねーし！

ちやーんと移動しました。

まあ、でもスピードはレベル5いきましたが・・・

10とかだったらもう見えねーから。

「は・・・速い・・・」

「な・・・!？」

「これは・・・」

「さすが姉ちゃんだったてばよ！」

上からチヨばあさん、サクラ、カカシ先生、ナルトです

ただーし！！

煙から出てきたのは砂の忍
由良ゆらいだったのは変わってない

S
I
D
E
曉

「な・・・!?!」

「どうした？イタチ??」

「もう、倒されてしまった・・・」

「なんだと!?!」

「私はまだ戦っているんですがね・・・」

ペイン「誰に倒されたんだ??」

ゼツ「一緒にいたのは、はたけカカシ、うずまきナルト・・・九尾の奴だね。あと
砂のチヨと春野サクラ・・・イタチを倒したのはうずまきセツナ・・・
うずまき
ナルトの実の姉だね。」

SIDE
アウト

「じゃあまた追跡開始よ！」

「分かった」

「やれやれ・・・これだから若いもんは・・・」

「うん」

「おっそく行くってばよ」

イタチVSセツナってことで（後書き）

うん。チートだ。うん。

無題

皆様、寒くなってきましたね。

そしてここに今重要なお知らせをいたします。

わたくし、作者が病気で入院することになりました。

手術もするので、更新がいつになるかはわかりません。

ただ、できるのはたまにいただいた感想などを返す事だけです。

明日から入院なので一応報告させていただきました。

本当に申し訳ありません。

いつになるか分かりませんが、退院したときはちゃんと更新して

お詫び申しあげます。

一〇二週間を目安にしてください。

更新は普通に1〇2時間を使っています。

病院ではさすがにそのようなことはできませんのでご了承ください。

作者より

特別編 クリスマスだよーん（*^|^*）（前書き）

皆様大変ご心配をおかけいたしましたm（――）m

やっと一時帰宅の許可をもらえたのでお書きいたします。
なんで入院したのか気になる人は活動報告をござんください。

一時帰宅つても今日だけなんで、一気に今日書きました（・o・）
さすがに疲れたゼイ（・・）メモメモ

今日はクリスマスなんで特別編をござんください（*^^）v

特別編 クリスマスだよーん（*^|^*）

サンタさん。

それは、子供のころ良い子の所だけにおとずねるとい
う
しかもプレゼントを置いていってくれる

自分の欲しいものが。

小さい子はもちろんそれが親だという事に気づいてない・・・

ある程度大きくなったら気づくけど

「いやー！早くサンタさん来てほしいってばよー！」

大きい子で信じてる人。

ここに一名いました

しかも恥ずかしいことに自分の弟です

「ナルト・・・あんたもう大きくなったから言っけど・・・
サントさんはいません。」

「え!?!?!」

ガチで気づいてなかったのかよ・・・

「じゃあ、誰だってばよ！？サンタさんの正体は！！！」

「本当は親なんだけど・・・あたしたちいないでしょ？？
二年前までは三代目が用意してくれてたのよ。」

なんで知ってるかって！？？

んなの朝起きたとき、ナルトは気づいてなかったみたいだけど

三代目のチャクラやにおいがプンプンしましたよ？

「それに大きい子にはもうサンタさんは来ないの・・・って

聞いてる?？」

「いや・・・父ちゃんと母ちゃんの顔・・・忘れたつてばよ・・・
確かに四代目火影だから写真とか見たら、思い出すけど
母ちゃんはあんまないし・・・
あの時の事はあんまりよく覚えてないつてばよ。」

「ふふ。あたしもなのよ。」

いきなり姿変わったと思ったらナルトと姉弟とか、名前は実は違
とか・・・
それだけで、頭がゴチャゴチャで親の顔をマジマジと見ていられ
なかった。」

「セツナー……ナルト……」

後ろを振り返ると、いの チョウジ シカマルがいた

「いの……」

あたしとナルトはいそいでさっきまでしていた暗い顔を
笑顔にかえた

「セツナもクリスマス会行くの??」

「いや、あたしたち同期とテンテンさんごとと+それぞれの担当上忍
は招待されてるのよ?多分・・・」

「多分って・・・まあけどそうでしょーね。」

で一緒に会場の焼肉Qへ向かう

「うおおおおー!!焼肉食うぞー!!」

「ほごほごにしろよ。ナルトもな」

「一応気は使ったばー!!先生たちがかわいそうだからな・・・」

「はは!!そうだな。」

で入ると・・・

もう始まってた。

貸切にしていて、ガイ先生とリーが稽古とかほざいて組手してる

正直じゃま

「いきなりこれエ!??」

「邪魔だつてばよ。」

「お肉ゝ お肉ゝ」

「あはは？ちよつと、殺^しめてくる」

「ちよつと！！セツナ・・・字違^うし・・・もうあたしは知らないわよ！！ナルトあんたどうにかしたら？？」

「俺もあーなつたらもう止められないつてばよ・・・
逆に巻き添え食らうつてば」

「だな。」

「むしゃむしゃぽりぽり・・・」

「リー！！いいぞ！！蹴りが重くなっ たじゃないか！！」

「ありがとうございます！！ガイ先生！！」

「よし！！組手は終わりで次はラジオ体操第2ぶほあ！」

「わかりがはあ！！」

「見ててうつとしいからネ？」

「ダブル蹴りクリーンヒットだってばよ・・・」

そついいナルトは適当にあつたイスに座つた

「あわわわ・・・ナルト君・・・あの・・・えつと・・・
その・・・と・・・となり・・・いいかな??」

と言つたときにはもうチョウジとリーが座つていた

おむかえはキバ、シカマル、ネジ

「つたく!!このバカ男どもが!!空気読みなさいよ!!」

「しゃんなろー!!サイテー!!」

「ナルトは自分の事になるとアレなんだから・・・
ヒナタ、あたしたちでよかったら一緒に食べようってばね。」

「いーね!!」

「お前ら!!クリスマスに貸切で焼肉だなんていーじゃないか!!」

「「「「「綱手様!??」」」」」

「綱手様！！待ってください。」

シズネさん・・・ドンマイです

「なーにしとるだのうっ?」

なんか話がややこしく・・・

であたしたちは結局、いのあたしヒナタ

さん
サクラ テンテンさん
綱手様 シズネ

という形で座った

担当上忍はアスマ先生と紅先生の邪魔しちゃあ悪いってことで

ガイ先生、カカシ先生、自来也さんの3人でナルトたちの席の近くに座った

「それでは、かんぱーい――！」

綱手様の合図によりクリスマス会が始まった

「ねえ、セツナってさあ・・・」

「何???いの??」

「サスケ君のこと好きなのォー??」

「ほえ??」

「いいね！」

「テンテンさん！！」

「そーよ！！気になるわしゃんなろー！！」

「わ・・・私も・・・」

「恋ねえ・・・いいじゃないか！！若くて」

「女の子の定番の話ですしね。」

「好きって言われても・・・よく分かんないってばね!」

「あー!! 顔赤い!! かわいいー!!」

ぎゅっといのに抱きしめられる

「ちょっと!! からかわないでってばね!」

「ナルトに聞いたんだけど、姉ちゃんが「ってばね」って言う時は動揺したりしてる時って聞いたわよ??」

「サクラ!! ひよえええ!!」

「私はヒナタの方も気になるな・・・」

「綱手様・・・酔ってます?？」

「シズネ!! 酔ってるわけないだろう!!」

のわりには顔真っ赤ですけど・・・

「わ．．．私はベ．．．別に．．．な．．．ナルト君とはあまり進展してない」

「誰か呼んだってば？？」

「はえ！！」

「ナルト！恋バナに突っ込んでこないの！！」

「まあまあ、恋バナはこれぐらいにして．．．カラオケするか？？」

「綱手様！！いいですねえ！！」

テンテンさんめっちゃ乗り気

「おっし！！何歌おーか！？？」

「西野 カナとか、パヒュームとか嵐とかエグザイルとか行く？？」

「いいねセツナ！！」

特別編 クリスマスだよーん（*^|^*）（後書き）

結局クリスマス会はカラオケ大会になりましたとさ。

合流（前書き）

やっと本編行きます m (|) m
おまたせいたしました (< | >)

合流

前回までのおはなし

イタチとセツナがたたかい、セツナとナルトの融合螺旋丸により
勝ったと思ったが、それはペンによる術で正体は砂の由良ゆらだった

という感じです。

本当は本読みながら書けばいいんだけどめんどくさいし・・・

で今は我愛羅を持って行った暁の本部に向かっている途中っす!!

確かこれには4つの札があっではずなきゃいけないんだけど・・・

あつしは、うずまき一族の血が流れているので神様？に聞いて頑張
って

うずまき一族の封印術とかおそわりました（笑）

だから術とか無効にできるよう修行しました

「見えてきたぞ!!」

おっと！…ってもうガイせんせーとか来てますやん。

「おー！！来たな！！」

「ガイ先生ここからは静かにしてください。」

あんま大声だとバレルし…

「う…うむ。すまない」

さーてと岩に手をあて封印の術式が浮かんできたのを強制解除する

すぐに岩が開き入れるようになった

「なッ!!」

カカシ驚きすぎです

「強制解除じゃと!？」

チヨばあさん以外に物知り

「「「?」?」
「「「

サクラ、ガイ、テンテン意味分からんって顔

「おー!!」

とナルト

「・・・」

ネジ無反応

って中見たけど今我愛羅の尾獣を引き抜いた後っばい

我愛羅はすでに地面に寝ていたからだ

まあ、チヨばあさんヨロシク

おい！！

まだみんないました。

「もう、来たか・・・うずまき一族とはやっかいだ。」

とペン

「ナガ もそうなものね」

小南

もうモザイクかけんのめんどい

でもディダラとサソリ以外消えたけど

まあ、どうせあとからトビ入ってくるし・・・

「以外と強者そろいじゃん、うん。」

「うるせえディダラ・・・」

さて、たたかいシーン行っちゃうか!?

合流（後書き）

次回戦闘です。

セツナ誰と戦わそう・・・

夢（前書き）

チヨはあさんファンの人いるのでしょうか・・・？
なんとなく気になります・・・。

夢

・ 本当はここでナルトが、我愛羅！…とか言って叫ぶんですけど・

そこまでバカ？じゃなくなったらしく唇をぎりぎりと言わせながら
ごっりつぶくの様子・・・

「お前らよくも我愛羅を．．．!!」

ポコポコ．．．

ん？？

横見ると．．．

九尾の妖狐状態で尻尾が2本・

いきなり来た
!!!

「ナルト!! 落ち着きなさい!!」

「これが落ちて着いていられるかってばよ！」

あのね、気持ちわかるよ??

でもそれを止める人の気持ちを考えなさい!!
結構な集中力とチャクラいるんだから!!

「ったく・・・」

尻尾が4本にならないうちに止めなきゃいけないんですけど、

もうなんかたたかい始まつてるし・・・

ディダラVSカカシ、ナルト、ガイ、ネジ

サソリVSサクラ、チヨバあさん、テンテン、リー

あらー！ー！

わし生き遅れた!!

「セツナ！ナルトを止めてくれ!!」

おりよ???

カカシさん？何言つて？？

「って・・・早エよ！・・・！」

もう4本行っちゃってるし！！

やべえ！！

「分かりました！！みんな離れて！！」

だから言わんこっちゃない・・・

よく見たらディダラもう気絶してんじゃねえか・・・

まあ、当たり前か・・・

おそるべし、九尾の力・・・！

これでナルトがコントロールできるから、マジですげえわ・・・

まず、クナイをナルトの四方向に投げて、

ってわかりやすく言ったらナルトを中心に長方形にクナイを投げる
でOK！？

もちろんすばやく！！

でこれもすばやく印を結び、さっき投げたクナイには実はチャクラ糸があり

それにチャクラを流して長方形の結界ができます。

これでナルトは外へ出られません!!

んで、封印を強くして・・・

『ふん、小娘がやりおって!!』

って九尾とナルトの精密？世界入っちゃたア！！！！

『小娘じゃないわよ。セツナっていう立派な名前があるの！！
あなたもク라마っていう名前があるでしょ？？』

『貴様なぜそれを．．．！！ふん．．．まあいい。』

『姉ちゃん．．．！！』

『ナルト．．．』

『俺ってば昔姉ちゃんを傷つけたよな．．．』

『私は気にしてないよ。ナルトも気づいてるかもしれないけど、私ね最近思うようになったの。』

尾獣はナルトみたいな扱いされたのねって!!』

『俺みたいなの?』

『うん。九尾もク라마っていう名前があるのに尾の数で名前が決められ

生まれながらに嫌われて誰も差し伸べる手がなくて・・・

そりゃ普通に何もなくても憎しみはたまっていくに決まってるわ。

『

ふん!勝手に言ってる!!』

『図星つばいけどね・・・』

『・・・そつか・・・俺が受けたあの殺気や暴力よりク라마の方が強いつてことか・・・』

『わしは別に気にしてなどおらんし、たかがちんくりんと小娘に同情もされたくないわ!!』

『同情じゃねえ。ここにも理解者がいるってことだ。』

『!!--』

『勝手に尾獣とか人を化け物しか見てない奴等がいる。俺はそれを見たくはない。』

『じゃあ、将来の夢・・・3つになったわね。』

『おう！！みんなに俺の存在を認めさせてやること！！父ちゃんみたいな

立派な火影になること！

そんで！！

尾獣やクラマのことを化け物として見ずちゃんと存在を認めさせてやる！！

それが俺の夢だ！』

『!-!』

『うん。いい夢じゃない　じゃあそろそろ・・・封印をもとに戻すからね』

「ふういんげん
封印元！！」

こうしてみるみるナルトが戻って行った

はあー・・・

ちよいと疲れた・・・

クラマと精密？世界で話したうえに封印をもとに戻すわ・・・

チャクラがアア・・・

「セツナ助かった。」

どうやら、私がナルトの封印をやってたうちにサソリもやったよう
だ。

ディ达拉もカカシ先生が雷切りでとどめをさしたし・・・

一件落着っばいな。

夢（後書き）

すごい真面目な話で、原作崩壊いました。

多分・・・大丈夫だね・・・うん。

意見とかありましたら言ってください。
それでは次回の更新で！！

我愛羅復活、チヨばあ死す（前書き）

タイトル・・・もっとマシなもんなかったのか？？

と思いますよね普通（＜―＞）
すいません。わたいの頭ではこれが精いっぱいなわけ
あるかも？？

ではどうぞ（*^―^*）

我愛羅復活、チヨばあ死す

なんとか、ナルトの九尾の妖狐も止められたし、デイダラやサソリも殺したので、いったん里に帰ることにしよう。

と話しているとチヨばあが

「ここから少し離れた場所に行こう。」

と言いだしたので行くことになった

「このあたりのう」

そして、我愛羅と言った

何をするきだろう。

みんなは思うだろう

でも死んでいる我愛羅に医療忍術を使い始めた

「チヨばあ様!？」

サクラが声をあげ、あたし以外のみんなが驚いている

ナルトは治療してくれると思い自分のチャクラも使ってくれるように
言い

チヨはあさんの所にいる

原作でも知っているが、この変なチャクラの感じ・・・

医療忍術と似ているけど少し違う

やっぱりするんだ・・・

知らないうちに自分でも言っていた

「転生忍術・・・」

みんながあたしを見る

「セツナと言ったの……よく知っておるな……」

チヨはあさんが難しい顔で答えた

「医療忍術とよく似ていますが、チャクラの感じが少し違います。」

「ふふ・・・確かにそうじゃな。」

「なんなんだってよ！？転生忍術って！！」

「時期に分かる。」

チヨはあさんはそついい少し笑った

説明すればナルトがやめろと言いつから

ネジは白眼で見て納得した様子だった

「くだらない年寄どもが作ったこの世界にお前みたいな忍びがいて
うれしいよ・・・お前は立派な火影になる・・・」

サクラ・・・師匠よりスゴいくノーになるじゃろう・・・」

「はい・・・」

サクラは声が震えていた

「セツナ・・・お前は頭も切れるし仲間のことも大切にする仲間思いのいい

奴じゃ・・・これからもそばでナルトを支える・・・火影のなつても秘書としていたらナルトも心強いじゃろうしな・・・」

「ありがとうございます。」

そして我愛羅がピクツと動いた

チヨはあさんが倒れそうだったのでいそいで駆け付けた

サクラも来た

2人で受け止めてなんとかセーフだった

気が付くと砂の忍びがいてテマリやカンクローウもいた

「我愛羅!!」

テマリやカンクロウが我愛羅のそばに行く

ナルトを突き飛ばして

「姉ちゃん……ばあちゃんは?？」

「転生忍術……自分のエネルギーをそのまま他の者に分け与えることができる忍術……」

チヨばあさんは、自分の命と引き換えに我愛羅を生き返らしたのよ・
・・」

ナルトは目を大きくしてすごく驚いていた

そしてナルトが我愛羅に肩をかしてチヨばあさんの所に来た

「みんな・・・チヨばあ様に祈りを・・・」

我愛羅復活、チヨばあ死す（後書き）

次回も真面目な話かも・・・

いよいよアジト潜入と行くな・・・

毎回短くてごめんなさいm（——）m

帰るべ（＾―・）・（前書き）

はい、今スランプ？状態です（*^^）v 笑っている場合じゃね
エだろオがア！！

何に迷ってる？かというと

ご存じの通りこの次の話はサイとヤマトを仲間にして大蛇丸や

サスケと会うやつです

そこでもうサスケを仲間にして帰ろう・・・と思うんです。

正直イタチ死んだの結構イヤだったんです

自来也も死なせないようにしたいし・・・

意見やアドバイスなどもらえたらうれしいです!! m (——) (m

あとみなさん、大みそかですが今日紅白とガキツカ
どっち見ます???

帰るべ（＾＿・）・

歩いて風の国へ帰りました

少し時間があればマーキングしよーと思うんです

瞬身の術のやつね

木ノ葉にはもうマーキングしたんですけど！！

もうすぐつーが大戦もあるし、あつたら便利かな？的な感じで

3日ぐらいチヨばあさんの葬式とかでしょんぼりしてましたが、もう大丈夫だアーーーー！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

サクラも落ち着いた？みたいだしそろそろ帰ろうぜな空気になってきた

「じゃあ元気でな、我愛羅。」

「ああ。」

「テマリやカンクローもね・・・」

「そっちな」

「俺達オマケみたいじゃん・・・」

でナルトは少し照れて

「本当はここだと握手とかしてわかるんだけど・・・俺ってばそういうの苦手・・・」

見ると我愛羅が手を出していた

握手とかしてわかるんですか？普通

で結局握手してたけど・・・

さて、帰るかーっとなるけど歩くのめんどい・・・

瞬身の術で帰ろっかな・・・

後ろを見るとガイせんせーがカカシせんせーをおんぶしてますた

・
・
・

マンガでもアレだけど・・・

生で見るとかなり気持ち悪い・・・

「おい・・・セツナなんだその表情は・・・」

カカシ先生が言う

どうやら今思ったことは顔に出ていたみたい

「いや・・・別に・・・アレですけど・・・ってかあたし先帰っていいですか？」

「どっという意味だ？」

セツナはカカシに不審がられた　なんでゲームコマンド！？ドクエかよッ！！

「意味って・・・木ノ葉に瞬身のマーキングしてあるからすぐ帰れ
『先に言えよッ!』」

みんなに突っ込まれた・・・

「はは!!この格好の意味はなかったな、カカシよ」

いやいや、勝手にあんたがしたんでしょ!!

あの・・・質問ですけど、みんな一斉に瞬身の術で帰れるんですか？？

まあ、やってみるか、

「できるかどうか知らないから、ナルトこのクナイ持ってて。」

そしてマーキングされてるクナイを渡した

まあ父さんのやつです

もちカカシせんす・・・もうカカシでいいや・・・

驚いていた

「セツナそれはどうしたんだ？？」

「ん？？このクナイは道具屋に特別発注してもらった？一本1万円」

クナイにしては高い方です

金には困ってないので50本買いました（金はまだ1億残ってる）

「んじゃ行くよ。みんなあたしにつかまってね」

そしてみんな腕や肩をつかむ

瞬身の術!!

シュ
ン
ッ
!
!

成功です！

みんなちゃんといるし

「本当にもう着いた・・・」

サクラ疑ってたの!?

「うん。みんないるし・・・ガイ先生はそのままカカシ先生を病院へ他の動ける人は報告に行きましょう」

なんかしきつた（笑）

まあ結局みんなさうしようという空気になった

でガイやカカシがいなくなったので上忍のネジとあたしが報告しました

「そうか・・・ご苦労だった。みんな次の招集があるまで待機だ！」

「分かりました。」

「セツナは残れでは解散。」

「にゃー！？」

みんなが出て行ったあと綱手様は言った

「暁と接触したらしいが・・・ナルトはどうだった？」

「そりゃ、えらい目にありましたよ・・・我愛羅・・・風影が尾獣を引き抜かれ

死んだとき九尾の妖狐が発生し尾が4本・・・

暁のメンバー、デイダラを倒しましたが暴走しそうな勢いだったので
いそいで封印を強くして抑えました。」

チャクラが半端なくいるからキツイ・・・

「それで修行の成果はでたのか??イタチと戦ったが・・・」

「いえ、報告通りあれは敵の術でイタチではないとすぐ分かりました。」

本気でしたらみんなも巻き添えにしまっし、そのへんが一気に吹っ飛んだり

したら困りますから、融合螺旋丸もかなり威力を落としました。」

シズネは「あひー」と叫んでいる

「とんでもないやつだ・・・呼び止めて悪かった・・・もういいぞ。」

「いえいえ、それでは失礼します。」

うん。

良かったよ

説教じゃなくて

木ノ葉崩し的时候森をほとんど壊したときめちやくちや怒られた

帰るべ（＾－＾）（後書き）

意見マジでお待ちしてます！！
それではみなさん、よいお年を！！

顔合わせ（前書き）

あけましておめでとございます！！（*^_^）v

いやー昨日のガキツカおもしろかった！！

ではござー！！

次の日

顔合わせ

ナルトは起きてくるのが遅かった

朝ご飯作って掃除終わったところで強制にナルトを起こしました

顔を洗ってきたナルト

「うー・・・まだ10時だってばよ!?!?」

「ご飯あたしも食べてないし・・・次は洗濯して布団も干すから起きてもらわないと困るの!?!」

「分かったってば・・・じゃあいただきます!?!」

「ん!!いただきます!!」

ちなみに朝食メニューはトマトサラダとサンドウィッチです

ナルトも大きくなってよく食べるようになった・・・

小さいころの約2倍

「ごちそう様！！姉ちゃんの料理やっぱりうまいってばよ！！」

食べ終わるのも早い・・・

「じゃあ着替えて洗濯物はカゴに入れてね。歯もみがくのよ？」

「了解ってば！！」

いつも１０時までで起こさないと家事の段通りがくるのよっ？

「さてと・・・ごちそう様」

で食器洗い

食器洗い終わり！！

洗濯！！

「ナルトー布団干してー」

「もうやってるー」

今日はべしじょうかな・・・

「俺ってばちょっと出かけてくるー!..!」

「はいよー!..!」

サイと会つとこか・・・

あたしも家事終わつたら出かけようー！！

P
M
2
:
O
O

出
か
け
よ
う
と
思
っ
た
ら
招
集
か
か
り
ま
し
た

も
う
サ
イ
と
会
う
イ
ベ
ン
ト
終
わ
っ
ち
ゃ
た
:
.

まあ、いつか・・・

洗濯もの取り込んでレッツゴー!!

― 集合場所 ―

来るとみんなそろっていた

「遅れてすみません。」

「いや、僕も今来たところだ。」

横見るとナルトとサクラは不機嫌だった

もうケンカ？したか・・・

「えーと全員そろったことでまず自己紹介しようか。」

「うずまきナルト」

「春野サクラです・・・」

「うずまきセツナです。」

「サイといいます。」

「僕はヤマト。今回の任務で隊長を務める」

サクラとナルトはサイに向かってガンつけてる

いやいや・・・

「セツナさんでしたっけ???ナルト君と同じ苗字ということとは・・・」

「うん、姉弟よ。”さん”づけはやめてね、よろしくねサイ。」

「そうですか・・・ナルト君と似てませんね・・・」

はっきりに言っただ・・・そこ

よく言われるけど

ナルトはカッチンッと怒りのコングが鳴ったけど

「ナルト。」

というムーとしてたがなんとかいけた

ヤマトは”はあ~~~~~”とため息ついてた

「まあ、とにかく顔合わせはこれで終わり。これから僕らカカシ班の任務の説明をする。

これより我々5名は天地橋を目指し・・・大蛇丸の組織に潜入している

” 暁 ” のスパイを拘束し連れ帰る。

大蛇丸とうちはサスケの情報が手に入れるチャンスだ

大蛇丸暗殺とうちはサスケ奪取の両方の作戦を立案できる
貴重な情報源を入手することになる。

心してかかるように！今から一時間後に正門に集合！
忍具を調えたあと出発する！」

で

「なんでサイって奴が力カシ班に．．．サスケの代わりだなんて．．．
姉ちゃんがいればいいってば!!」

「うーん．．．あたしに言われても．．．大蛇丸．．．
絶対見つけたら今度こそ殺す」

「うん。」

サクラも気合入ってる

でサクラとわかれたあと

「姉ちゃん・・・サスケのことだけど」

「うん。絶対この任務成功させなきゃ・・・」

あたしがあるときサスケを止めといたらよかったのよ

じゃあこんなことには・・・

中途半端な気持ちでいたからダメだった

あのととき止められなかった分を今回で巻き戻す！！

「忍具の整備で言っただて、もうできてるってば・・・」

「うん。じゃあ集合場所行って父さんや母さんにお祈りしようか。」

「ああ!!」

で集合場所

30分早いけど2人で四代目火影の顔岩に向かって祈る

祈るって言ったて顔岩見て言ってくるねとかするだけ

「父ちゃんと母ちゃん・・・また会いたいってば・・・」

「うん。落ち着いた心でゆっくり話したい・・・」

女神が何もみませんようにと願う

「でも・・・一番のあたしの願いはナルトの安全だよ？」

「姉ちゃん・・・ありがとってば!!」

で2人とも笑ってるわけですよ

SIDEヤマト

集合場所に行くとナルトとセツナがいた

- ・ 笑い合ってるけどあれじゃ周りから見ると恋人同士だよまったく・

カカシ先輩も言っていたけど本当にそうだよ

ナルトはクシナさん似で笑ってセツナは四代目似で笑ってる

髪の色は逆なのにナルトは四代目に髪は似てるけど性格はクシナさん似

少しかしい所もある

b y カカシ

セツナはクシナさんに髪似て性格は四代目怒るとクシナさんみたいになる

b
y
カ
カ
シ

SIDE
アウト

「よし!! みんなそろったね。これよりカカシ班出発する!」

顔合わせ（後書き）

なんとか終わった・・・

ではまた次回！！

さ・・・サクラッー!! 落ち着いてエー!! (前書き)

タイトル通り今回はサクラがサイをぶん殴るやつです。

さ・・・サクラッー！！落ち着いてエー！！

みなさん・・・

いま突然ですが・・・

ケンカファイテングっす！！
理解不能

説明しますとナルトがサイ気に入らんツって言いだして
ヤマトがなんだよそれ？ってカカシの班のなんだろう？
って言ってナルトがサイを同じ班の人として認めないツ！！
と言ってサイもその方が助かると言って
サクラが今語りだそうとしてるところです

「確かに大切なのはチームワーク。ナルトは・・・サイ・・・
あなたのことを知らないから少し言い過ぎたところもある
ごめんなさい。ナルトのことは許してあげて・・・」

サクラいいこと言っじゃん！！

このとき

あたしは忘れていた

サクラがサイに何かをすることを

「さ・・・サクラちゃん・・・」

「ナルト、言い過ぎたから少し反省しなきゃね。」

「ハア・・・少しでもマシな子がいてよかったよ。」

「別になんとも思っていないよ。」

「そう・・・よかった。」

うん

じゃあ行きますか・・・

と少し歩き始めたとき

ドコッ!!!

なんか暴力ふるった効果音聞こえた・・・

「!？」

「え!？」

「!？」

見るとサクラがサイをぶん殴っていた

「へ？？ちよ・・・さ・・・サクラー！？？」

「私のことは許さなくていいから。」

「おおおお、落ち着いてサクラ、ね？？」

「姉ちゃんが落ち着いて・・・」

「あのね、ムカつくのは分かる。サスケのこと何にも知らないのに

そんなこと言われたらムカつくよ。

けど、殴ることはないでしょ?？」

好きな人バカにされたらムカつくよね・・・

でもサクラ性格綱手様に似てきてる・・・

「セツナはやさしいのね・・・仲間のことバカにされても表情もかえずに・・・私にはできないわ・・・」

「でも、今サイは仲間でしょ?それに今回の任務はサスケを奪取できるチャンスがあるかもしれない・・・

仲間割れしてる場合じゃないし・・・」

理由になってない

自分でも思ったけどサクラは黙った

納得したのかな？？

「本当にマシなのはセツナだけみたいだね・・・
ナルトもサクラもサイも、もっと冷静になってくれよ・・・

君たちは下忍になったばかりのぴよっこじゃないんだから・・・」

「そつだ・・・最後に忠告しとくね。

サイ・・・今度サスケの悪口言ったら・・・今度はあたしがぶん殴る」

笑顔で殺気をレベル5にして言いました

「サクラもナルトも仲間じゃないとか言い出したら

手加減はしないから。」

上に同じく

みんな震えてたよ・・・

「大丈夫！！しなかったらいいんだから！！
じゃあ行くよー！！」

と思ったら

ヤマトが四柱牢の術を発動していた

サクラはなんで木遁使ってるの!?

っ
て
い
う
感
じ

「セツナ・・・仲間同士に脅しの為に殺気を放つたらいけないだろ
う??」

「いやー・・・普通に説明したら長いし・・・」

「ハア・・・君たち・・・いい加減これ以上もめると本当に牢に
ブチ込むよ
天地橋に急ぐっていったってまだ5日はあるしね・・・」

そこで提案だ。君たちの親睦を深めるため

1日この牢に入れられるか、温泉旅館で一泊か・・・

君たちも僕のことを知らないだろう??

僕はやさしい接し方が好きだけど恐怖の支配も悪くないよ?。」

ヤマトもなんだかんだいって殺気出してるじゃねエか・・・

みんなもちろん、温泉がいいッ!!

というので温泉に行きました

さ・・・サクラッー!! 落ち着いてエー!! (後書き)

短くてすみません・・・

プロフィール2 - ッ!! (前書き)

なぜいまごろプロフ!?
って思ったあなた・・・

K A ・ S H I ・ K O ・ I です
っていうか正常です

理由・・・ベ・・・別に作者が土遁、雷遁、水遁使えることを
忘れないようにとかそんなんじゃない!!
嘘つけッ!!

プロフィール2 - ツ - !

いまさらプロフィール

主人公こと うずまきセツナ

性別 女

年齢 女性に年齢を聞くもんじゃないツ!! (ナルトと双子な
んで同じ年)

誕生日 10月10日

容姿 髪はクシナと同じ色。長さは背中まで前髪はクシナみたいな
感じで

前髪の少しをあみこみしている

目の色は青色

顔はミナト似らしい

なので美少女というもの（本人は気づいてない）

性格

めったにマジ切れすることはないがマジ切れすると
赤い血潮のハバネロみたいになるらしい

好きなもの 甘いもの、仲間

嫌いなもの 以外と虫は無理

残念なこと

恋愛にかんしては人のことは分かるが、
自分になると分からない

使える術

土遁、雷遁、水遁が使える
螺旋丸も投げることができ、チャクラコントロールで
いろんな術を操れる

綱手ゆずりの怪力&医療忍術の持ち主

封印術はナルトの暴走を止めるため会得した

プロフィール2 - ヅ!! (後書き)

ざっとこんなもんですね・・・

めちゃくちゃチートですがお許しをm (――) m

本当は自分のイメージセツナを小説に入れたいんですが
パソコンとカメラをつなぐ線がないんです・・・

ヤマトって金持ちなの?? (前書き)

上のタイトルは思っています。

だって結局温泉旅館はヤマトのおごりだし

36巻でヤマトがラーメン代払ってるし・・・

謎です・・・

ヤマトって金持ちなの??

ばんばんばんばん ばんばんばんばん

って入浴シーン書くわけねェだろ・・・

例のナルトが風呂場で叫ぶやつあったけど・・・

そんなことをよそに風呂でて浴衣です

髪乾かすのにてまどった・・・

でもサクラは待ってくれたんで本当にやさしいことを実感しました・
・

部屋に行くともう晩御飯が用意されていました

「おゝ・・・豪華ですね・・・」

「本当だ・・・スゴイ」

ナルトとサイは座っていてもうスタンばってたけど・・・

「じゃあいただきます。」

ここでナルトがずっとヤマト隊長でいいって言うてだけでも
さすがにやばいと言っていた

カカシのときはいつも旅館代とかは割り勘だったから・・・

ある意味ドケチです

ここで任務の話をしようって感じになるけど今日は親睦深めるためにここに泊まったから、任務の話は明日にしようということになった。

いま思ったら班の中で女1人って結構いやだね・・・

うちの班はよかったよ

朝
・
・
・

起きたらサクラはまだ寝ていた

時計を見ると・・・

6時

うーん・・・主婦の週間っていつのが身についてしまった・・・

一応サクラを起こさないように忍具の確認をして窓を開けた

サイはもういた

じじする？

1、サイの元へ行く！！

2、見なかったことにし寝たふり

3、普通に起きて気づかなかったフリをする

3にじみ

布団をただんでふすまを開けた

お茶でも入れて飲もうかなーと思ったら

「セツナか・・・早いね。もう起きているのかい?」

ヤマトに話しかけられた

「おはようございます。いつも朝ご飯作るから多分それが週間に・・
」

するとヤマトが真剣な顔をして小さい声で言いだした

「ナルトの九尾のことは綱手様から聞いている・・・」

「隊長はどうやって封印をするんですか？」

「僕は木遁を使う。初代火影の首かざりは幸運なことにナルトが持っているそれで抑える」

うん

知ってる

「そうですか。なるべく4本目がでるまでお願いします。」

ナルトの寿命を縮めることになるし、他への被害が半端ないし

で話は終わりサイを呼び戻し出発してまた歩く

夜

「この辺りでいいかな・・・木遁　四柱家の術!!」

で

立派な木のおうちが出てきました

「今日はここで野宿だね。」

「これ・・・野宿っていわないんじゃない?」

それは思う

で中は結構広かった

「みんな少し集まってくれ。それにサクラ・・・
君に聞いておきたいことがある。」

「何ですか？」

「・・・」 暁”のサソリについてだよ。砂隠れからサソリのファイ
ルは

一応もらっただけど奴の性格や言動、仕草や癖なんかがあつたら

なるべく詳しく教えてくれ

目の前でサソリを見たのは君だけだからね。」

確かに・・・

あたし・・・ナルトのチャクラ抑えてた

ナルト・・・九尾の妖狐状態

サイ・・・知らない

だもんね。

「どういうことだってばよ？」

「ヤマト隊長はサソリに変化するの。」 暁”のスパイはサソリが天地橋に
来ると思っているから」

「スパイは相当のリスクを伴う行為。相手もかなり慎重になっ
てことさ」

「それに万が一・・・」 暁”の畏という場合も考えて僕がまず1人で
近づく。

君たちは僕の指示があるまで動かないでくれ」

「砂隠れにも由良っていうスパイもいたしね・・・」

「死に際にあの言い方・・・多分嘘じゃないと思うけど・・・」

「どちらにしてもそのスパイ・・・相当のやり手でしょうね。」

「やってやるってばよ」

「さてここからが本題だ・・・今回の任務をもう少し具体的に言っとだね・・・目標はあくまで逮捕であってターゲットを死傷させてはならない。もし戦闘になったとしてもだ

殺してしまえば大切な情報源を失うことになるからね
そしてこの手の任務は敵を倒すより困難だ。
デリケートな任務のためにまずは僕が突入役だ

そして君らは支援役・・・

作戦は簡単第一僕がターゲットを拘束する。

第二もし僕がターゲットを拘束し損ね戦闘になった場合・・・
君たちも戦闘行動へ移行しろそのタイミングは僕が合図する
そして第二の場合においては常にバディシステムで行動する

1人が動くときは相棒が必ずそれを援護する
相互支援が原則だ。

でそのバディシステムを今発表しておく。

ナルトとセツナ、サイのチーム

僕とサクラのチームだ」

なるへそ・・・

ナルトと一緒に融合螺旋丸も使えるし・・・

で明日練習することになった

ヤマトって金持ちなの?? (後書き)

最後適当です・・・

ヤマトって上忍?? 中忍??

どっちだァー!!

すんごく短いっす(前書き)

更新さぼってすいません。

言い訳をしたら4日から部活と塾の冬季講習再会して
更新する暇ありませんでした

それだけです

すごく短いっす

で次の日

谷のとこ行って天地橋作って今から練習です

内容はヤマト隊長があたしたちの能力を知りたいから手合せ？
つばいのします

サクラは原作通り1人

あたしのところはナルトとサイがいるけど・・・

やっぱり超不安・・・

で始まるの合図が出たから・・・ん！！します

まずナルトの援護といこう・・・と思ったら影分身を1人サイに
化けさして螺旋丸・・・

螺旋丸って・・・

すぐばれちゃうじゃねェか・・・

でサイはナルトごとヤマト人形をしばった

もちろんちゃんと助けた

「ナルト大丈夫?？」

「サイってば仲間の俺ごとしばりやがって!?!」

「次行くよ!!」

ヤマト隊長発見!!

「水遁 螺旋放流!!」
らせんほうりゅう

水の丸い奴のかたまりが何個か出てぶち当たる

ヤマト隊長はもろに当たってイタそうだったからもう攻撃はやめて
瞬身の術でヤマト隊長のそこ行って終了!!

「セツナすごいね。いつのまにマーキングしたんだい？」

「さっきの術螺旋放流の中にマーキングを仕込んでいたんです。」

で人に当たったらそのまま、マーキングされる

もちろんマーキングも最小にしました

ヤマトはなるほどね。 っという顔をひとつた

うん。

帰ったらカカシ&綱手様その他に報告されるSE

マジでやべえな・・・ 何がだよッ!!

すんごく短いです（後書き）

めちゃくちゃ変な終わりかたですいませんm（――）m

NARUTOのアニメ・・・原作やっとうきました・・・
ED変わってるし若干クシナ出てるし・・・

ちょっと手抜きっぽいし・・・ コラッ！！アニメスタッフに謝れ
ッ！！

前のフォエバーって奴の方が絵も唄も好きだったんだけど・・・

あと登録者が70人行っててスゴイうれしいです！！
ありがとうございます！！

いよいよ始まるぜ(笑)(前書き)

タイトルの意味・・・天地橋アイツが来ます

いよいよ始まるぜ(笑)

でりハ終わりってなるんですけど

ナルトがいきなりサイの胸倉つかんだ

「なんです？」

サイ・・・ぼけてんのか???? んなことあるわけないだろ!!

「お前仲間って言葉 知ってつか？」

でポケット?から筆と巻物を取り出し

仲間と書いた

「もちろん知ってますが・・・それが何か？」

でナルトがサイをにらんだ

「ナルトその辺にしときなさい。サイも何もナルトごとしはることはなかったんじゃない？」

「冷静さを欠いた奴をかばいながら戦うのは理想じゃない。邪魔なだけです。」

カッ
チー
ン

「
んだと
コラ
!!」

ナルトあたりまえにブチ切れる

「サイ!!今は同じ七班の仲間でしょ!!?
確かにナルトには冷静さが無いけど邪魔はないでしょ!!??」

あたし若干ひどいと言いました

でも弟をここまで言われて黙ってるやつなんかいるわけねえっつの！！

「ナルトに言われるのは分かりますが、セツナさんには関係ないでしょう？」

どうしてかばったりするのですか？」

セツナの怒りのコングが鳴った

「関係ないわけあるかッ！！弟をここまで言われたらさすがにあた

しも

黙ってられないってば!!

それでもかばわない奴はただの自己中だってばね!!

あんたこそあたしたちの何が分かるのよコラア!!」

セツナはサイを殴った

サイは1メートル吹っ飛んだ

ナルト、サクラ、ヤマトは啞然としている

「ちょ……セツナ!? 途中までいい話だったけど!?!?」

「あははっは！！大丈夫ですよヤマト隊長医療忍者2人いますから。」

「「「（そういう問題じゃねえよ）「「「

3人の心の声が重なった

サイを見ると左ほほがめちやくちや腫れていた

うーん・・・

手加減したんですけど・・・

まあでも医療忍術で治した

あたしが

そこは責任感じたんで

で

本物の天地橋！！

「ヤマト隊長……うまくやってよ……」

「お久しぶりですサソリ様。」

「5年ぶりですね」

薬師カブト・・・

「尾行は・・・？」

「大丈夫です。」

「調子はどうだ？」

「サソリ様の術が解け自分が何者であるか思い出した時の

妙な気分が残ってて・・・まだ少し頭が重いです・・・」

カブト今度こそ殺す

「いくつか質問する」

「時間ありませんが手短にお願いします
大蛇丸の目を盗んでここまで来るのに命がけですから。」

「アジトの場所とうちはサスケについての情報をくれ。」

いよいよ始まるぜ(笑)(後書き)

明日更新できるかな??

分かりませんがご了承ください

あとサイファンの方すいませんでしたアアアm
() m

罪悪感（前書き）

はい

もうここから、原作崩壊いきまーす

罪悪感

なんやかんやで後ろの奴等も呼べば？と
大蛇丸が言った

でてきました^m^

「はぁーい！！大蛇丸 呼んじやってよかったのかなア??」
挑発ぎみに言いました

「あら、美しくなったわね。それより”呼んじゃって”とはどづい
う意味かしら・・・」

私は次の器をあなたにしようと思ってるのよ？」

「関係ないから。ってかサスケは??」

「うふふ・・・いるわよ。今そこに」

でサスケが出てきた

目の色が真っ黒だった

変．．．．．ですよ？？

「大蛇丸あなたサスケ君に何したの？」

「ふふふ．．．彼ったら強情でね．．．ちょっと術をかけて私が操
ってるの。」

「．．．んだとコラァ！．．．！」

これについてはサイもびっくりしていた

ヤマトもね

「デメエ・・・マジで許さねエってばよ!..!」

「堪忍袋なんてとっくに切れたわ!..!しゃんなろー!」

「極秘任務があったんですけど・・・それどころじゃないですね・・・」

あたしはとてつとてっ..

何なの??

あたしはともかくサスケまで巻き込むなんて

どれだけ・・・

あたしの大切な人を傷つけばいいの??

白だって・・・血はつながってなくともあたしを実の姉のようにしたってくれた

サスケだって同期の大切な仲間

ブチ

「大蛇丸・・・いや・・・まず

カブトからにしよう!」

殺気と戦闘レベルを6くらい出した

落ち着けと思っても落ち着かない

赤い血潮のハバネロ・・・

復活してやるよ

周りのみんなはびっくりしている

サスケは大蛇丸に操られナルトやサクラ、ヤマト、サイを攻撃した

あたしはスルーですか？

まず瞬身の術でカブトの背後に行き、
氣配をけしカブトをクナイで
心臓を刺し
えぐった

血はドバドバ出て血がはねてあたしのほほについた

確実にカブトは死んだ

心臓をえぐったし

「ザコに術を使っただけでもマシと思え。」

そしてクナイを抜き一応巻き物を取り出し

口寄せの形で巻物に入れた

気が付くと

辺りは血の海

自分でも震えるくらい

サスケと戦いながらもあたしの仲間は見ていた

ナルトは自分の姉が殺ったとおもえず

「姉・・・ちゃ・・・ん??」

と言っていた

サクラも普段やさしく自分の為に叱ってくれたこともある
親友がそんな事するはずないと思いながらも震えて
ほほには涙が伝わっていた

「嘘・・・嘘よ！！セツナはそんな事しない！！心臓を刺してもえ
ぐったりなんか・・・」

サイとヤマトはただ啞然とするしかなかった

我にかえる

たたかいながらそんな表情してるあんたらはスゴイ

しかもサスケ相手に

と思うのもあれば

今の気持ちは罪悪感しかない

自分がいる

いやその気持ちの方が多い

腹が立ってるといえ自分はある事までしてしまっのか
仲間の目の前で

冷静を取り戻しても何回も思ってしまう

いくら赤い血潮のハバネロだった母さんの血を継いではいえ、
母さんは絶対ここまでしたことはない

自分自身におびえてしまう

「ふふふ・・・何をおびえているの？セツナちゃん・・・
それでいいのよ。」

血はつながってないとはいえ、実の姉のようにしたってくれた妹を殺されたんだもの・・・
復讐するのは当たり前よねえ。」

ちがう！！

ちがう！！復讐なんかしたって白は絶対喜ばない！！

「強くなろうと思ったのは白や再不斬を失って自分の未熟さにあきらめたんでしょ？」

確かにそうだけどあたしはこれ以上仲間を失いたくないだけ！！
仲間の為なら命を捨てると言われたら捨てる！！

でも・・・そう思う自分があるならなんで・・・なんで

あんなえげつないやり方でカブトを殺してしまったの？

クナイを刺して終わりでよかったじゃない！！

”ザコに術を使った”とか言わなくてよかったんじゃない！！

「セツナ！―あなたは私の器になるのよ！―」

大蛇丸が蛇の姿になり襲いかかってくる

逃げればいいものの足が動かない

もう

ダメか

「姉ちゃん!!」

「セツナあ!!よけてえ!!」

「泣いてる場合じゃない！ありません！！避けてください！！」

「避けるんだ！！」

「千鳥!!」

バチッ!!

目の前には蛇の姿で息絶えた大蛇丸が横たわっていた

罪悪感（後書き）

・
・
・

すいません

なんか途中から作品ちがうよね??ね??
ね???

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3046w/>

-NARUTO-転生

2012年1月10日20時45分発行